

## 『水滸』における「対立」の構図

笠井直美

本稿は、この題から恐らく予想されるであろう次のような問いを問うものではない。『水滸伝』においてどのような「対立」が存在するか。『水滸伝』においていかなる経緯で好漢たちは貪官汚吏と対立するに至ったか。彼らをして姦臣を糾弾せしめた背景は何だったか、…等。とりわけ、好漢が貪官に反するのみで皇帝に反しなかつたのはなぜか、ではない（この問いは「好漢対貪官」の対立を自明の前提とし、その対立の構図自身について問うことを拒んでいる）。ここで問うのは、『水滸』の物語にこうした対立の構図を「読み取る」時に抜け落ち、覆い隠されてしまうものかであり、こうした対立の構図が何を捨象し、排除した上で成立するかであり、こうした対立の構図の出自である。

なお、本稿では、小説『水滸伝』の幾つかの代表的な版本を主に、『水滸伝』に取材する・または梁山好漢を主人公とする幾つかの戯曲作品を加えて検討する（作品の外部にも、論ずべき点多いと思うが、現在の筆者にはそれだけの能力も準備もなく、また、まずはテキスト自体に即して論ずべき問題であると考え）。『水滸伝』の版本は大別して文繁本・文簡本の二系統に分けられ、文繁本は分巻系（百回本）と不分巻系（百二十回本、百回本、七十回本）に大別される。

不分巻系は分巻系に改変を加えたものであると考えられる。分巻系は現存最古の完本と考えられる容与堂本（万曆三十八年<sup>①</sup>刊）を代表として用い、不分巻系は、系内の各版本の關係について解決済みでない点が多いが、筆者が目睹し得たうちで最も古いと目されている宮内庁書陵部蔵「忠義水滸全伝<sup>②</sup>」を用いる。ただしこの名称は多くの版本が用いており、また、刊行した書肆も不明であるので、小引に署名のある楊定見の名をとって便宜的に楊定見本と称する。また、文簡本の各版本の關係についても多くの問題が残されているが、大別すると、所謂挿増本<sup>③</sup>や余象斗本（万曆二十二年刊<sup>④</sup>）が存在する系統と、三十巻本の系統がある。後者は本稿では用いない。前者の系統の中では、より古いと目されている挿増本は残本が数部あるのみなので、挿増本が残存し、見られる部分についてはこれを用い、その他は余象斗本を用いる<sup>⑤</sup>。挿増本・余象斗本両者に共通する要素について述べる場合、特に区別する必要がない場合には、便宜的に文簡本と称する。従って、以下でいう文簡本は、文簡本全般を指すものではなく、その一系統を指すものであることをお断りしておく。なお、現存の文簡本は、基本的には文繁分巻系統の本を刪節し、それに征田虎・王慶の挿増などが加わって成ったものと考えられている。

### 一 「善玉 vs 悪玉」の対立の構図

#### (一) 征田虎・王慶部分における「善玉 vs 悪玉」

梁山泊の好漢たちが招安を受けて官軍となった後、百回本では遼と方臘の征討に従事することになるが、征遼の後、さらに田虎、王慶と二箇所の叛乱を鎮圧し、征方臘に至るとする物語も広く行われていた<sup>⑥</sup>。まずは、現存する資料の範囲では、文繁本に先んじて征田虎・王慶の段を取り入れたと考えられる文簡本の王慶出身伝を見てみよう。

太尉となった高俅は、かつて世話になった柳世雄を取り立ててやり恩返ししようと思ひ、腕の立つ禁軍教頭王

慶に、柳世雄との八百長試合をやるよう依頼する。王慶はやむなく承諾したものの差し出された金は受けず、試合では柳世雄を負かしてしまふ。そのため高俵に難癖をつけられ、淮西に流される。妻と涙の別れをし、赤ん坊は自分が連れて行くが、途中病気で死んでしまった。途中、土地の武芸好き龔端兄弟に武芸を教え、黄達を打ちのめしたりして牢城宮に到着、巡檢龐元が人々に棒術を見せているところに戦いを挑み、怪我をさせる。しかし、龐元の姉は実は兵馬提轄張世開の妻で、事情を聞いた張世開は、王慶に用事にかこつけて金を使い果たさせ、命令を果たさなかつたという理由で毎日のように棒で打ち、張世開の妾賀氏に取りなしを頼んだのも見つけられて裏目に出、棒打ちされること度重なつて、とうとう王慶も怒り張世開を殴り殺す。王慶は龔兄弟、ついで従兄弟范全を頼り、小遣い稼ぎにと博打場を開きに出かけた快活林で、その顔役段五虎・段三娘にほられ、怒つて闘い、勝つ。段三娘は自分より強い王慶が気に入り、段家の婿とする。夫婦で肉屋をやっていたが、かたき龐元に見つかり、龐元・捕盜に追われ、逆に龐元を殺してしまい、東留村の廟に隠れて休む。この廟の中で王慶は夢を見、廟の神劉慶が「自分は茶の商人であつたが、洋子港口で一群の強盜に襲われ後ろから斬られて死に、妻も自刎して殉じた。自分の生まれ変わりがおまえ（王慶）であり、段三娘は自分の妻の生まれ変わりであり、龐元は後ろから斬りつけた者の、張世開は前から襲つてきた者の生まれ変わりであり、高俵もその一人である。自分は生前正直せいじよくだつたので、ここ東留村の土地神となつた。おまえは出世するだろうが、ここ東留村の子孫を害さぬように」と告げるのを聞く。廟に追手が来たので王慶は帳の中に隠れるが発見されてしまい、さらに数人を殺して段三娘と合流し、紅桃山の山賊廖立のもとに投ずることにする。紅桃山では王慶は廖立と試合をし、勝つたすえ仲間入りを認められるが、その夜廖立が夜討ちを仕掛けてきたのを返り討ちにし、首領の椅子を譲られる。さら

に王慶の運勢をしばしば見た八卦見李傑、龔兄弟が仲間入りし、李傑を軍師として「一、殺人放火を許さず。二、人の妻女を奪うを許さず。三、商人を襲うを許さず」という軍令を行い、天下の好漢を招き、一年の間に將二百人兵二十万人を得て、秦王を称し年号を改めるに至った。(挿増本巻二十)

この話は何らかの話本・語り物などに基づいていることを思わせ、一見してわかるように林沖・王進の物語と非常に似通っている。また、龔兄弟、黄達との関係は、武松と施恩、蔣門神の関係と似通い、龐元、張世開との関係は、多少武松と蔣門神、張団練・張都監との関係と相通ずる所があつて、武松物語との類似も感じられる。さらに廟に隠れて夢に神を見るのは宋江物語と類似する。(なお段三娘を娶る話は、成化説唱詞話『花関索出身伝』で花関索が鮑三娘を娶る話と似通う<sup>(8)</sup>)。王慶にふりかかる災難は、王慶が強いこと、その強さを人に見せつけずにはおかない強気な性格が原因しているとはいえるが、王慶自身は決して道徳的な悪人ではなく、悪いのははっきり相手側である。また、彼の前世は「正直」をもつて神となつた人物であり、段三娘の前世は烈女であり、王慶を迫害した人々は前世でも悪人であつた。王慶と龔端らの関係は「聚義」と表現され、紅桃山に入つた後の王慶の一派は「放火殺人を許さぬ正義の賊であり、「天下の好漢を招く」という点でも梁山泊と共通する。つまり、ここでは王慶及びその一派は梁山泊に入つた好漢達と同様の人々であり、同様の正義を(少なくとも称した)賊である。梁山泊軍と何か質的に違つた悪なる賊では決してない。

また、文簡本では、田虎・王慶に対する忠節なるものも称揚の対象になつてゐる。田虎の將、元仲良が捕えられた際、「忠臣は二君に事えず」と死を望み、宋江は「草君(偽天子)でもこのような忠臣がいるのだな」と嘆息する。

元仲良は、宋朝に事えるのが筋だと呉用に諭されても死を望む態度を変えないが、宋江が宴を開くと言ひ出すと突然、

魏州の東の天王堂で世を棄て修行したいと言い、宋江が贈ろうという金は固辞して天王堂に去る（このあたりはともおかしいので、余象斗本が先行する本に何か改変を加えたり、刪節を行うなどの際に舌足らずになつてしまつたのかも知れない）。この詩は元仲良を「一點忠貞不改移」とほめてゐる（図についてゐる題は「元仲良忠烈不受金」で、そうだとすると宋江の金を受け取らなかつたのが「忠烈」だということになるらしい）（余象斗本卷十九）。また、魏州城で宋江方（といつても田虎方からの降將）十將を落とし穴にはめて殺した葛延等十將が捕えられた際も、宋江から投降を勧められたが、「生きては田虎の將となり、死しては河北の鬼とならん」（河北は田虎の本拠）と死を望み、十將皆同死せんとの気持ちか堅いため、呉用が「彼らの意をくんで、殺してその名を全うさせよう」といい、宋江はやむなく彼らを処刑した。ここにはさまれた詩も「千古精忠猶不泯」とその忠節を称えている（余象斗本卷二十一）。王慶の將で石柝城を守る丘翔が捕えられた際も、「仕秦（王慶の国号）爲秦」「有死而已、早賜誅戮」と言い放ち、宋江は刑を加えるに忍びなかつたが、呉用が「此人用之不可、放之亦不可」と、張招討のもとに送つて斬に処すことにし、丘翔は張招討の軍中で竹で喉をついて自殺した。詩は、「被捉忠心更不移」と、その忠をほめたたえている（挿増本卷二十）。これらを見るに、文簡本は、田虎や王慶に対する忠も、それぞれの主に尽くしている以上、忠と認め称揚するという立場をとつてゐるといえよう。それは同時に、田虎・王慶も忠節を尽くす対象になり得ると認められているということでもある。

また、文簡本は楊定見本と比べた場合、後から降参してきた將の地位が相對的に高い。降参した將軍達は宋江と義兄弟關係を結び、水滸百八將と「兄貴」「弟」と呼び合う仲になる（文繁本で、百八人が百八人以外の人と結義するのは、晁蓋を別にすれば、李俊らが費保等と結義した時（九三））だけである。この結義はすなわち、梁山泊集團との、

彼らの決別を意味しているのであつて、費保等との「義」を守る時に彼らは梁山泊の仲間を抜けるのである。<sup>(9)</sup>孫安（九河灣竜王）、喬道清（広法金童）、瓊英（六甲之主、「之」は「公」の誤りか）など、天上の神格の生まれ変わりもある。亡くなったときには（征方臘の段で百八好漢が亡くなった時にされるように）回末でその名が一覧になつて出る。亡くなった時の供養のされ方も手厚い（こういつた描写は楊定見本では落とされ、せいぜい宋江が大変嘆いた、といった程度になる）。つまり、文簡本においては賊軍から降参してきた将も、（降参しないで死んだ将も、その親玉田虎・王慶さえも）、同じ好漢の一人、対等な相手として扱われており、梁山好漢との質的な相違はほとんど感じられないと言えよう。<sup>(10)</sup>

さて、文繁本の中で征王慶・田虎の段が含まれている百二十回本（楊定見本）では、王慶出身伝はどうなつていただろうか。

王慶は開封府の副牌軍だったが、その父親は裁判ぎたを起こしては人を陥れる人間であり、父母が甘やかしたためわがままで悪事ばかり行い、父母に意見されれば罵り返すありさま。ある日、玉津園から良嶽、東嶽廟に遊ぶ美女を追いかけた。美女の方も王慶に気付き気がある様子であつた。その美女は嬌秀といい童貫の養女で、蔡攸の息子の許嫁であつたが、未来の夫が薄馬鹿であると聞き気に病んでいたため、侍女と仲人婆の取り持ちで王慶と密通し、やがてこのことは広まつて童貫の耳にも入つた。王慶はある日、椅子が自分で動くという怪異を見蹴ろうとして逆に腹の筋を違え、勤めを休んだところ、童貫の意を承けた開封府尹に責められ、拷問されて、陝州に流刑と決まつた。出立にあたっては岳父から、路銀三十兩の代わりに娘に離縁状を書くように迫られる。王

慶に怒った余り病氣になって失明していた父親が見送りに来ても、その言葉に口答えしたため、父親は「不孝者め」と怒って帰ってしまう。(龔兄弟、龐元とのいきさつは文簡本と大きな違いはないが、張世開は牢城の管宮、その妾が龐元の姉ということになっており、張世開を殺した時点で龐元を殺してしまう、王慶は龐氏が取りなしているのを聞いていながら彼女も殺そうとした、など小異がある)。王慶は母方の従兄弟范全を頼り、房州に逃げる。ここの賭博場で大勝ちしたのに掛け金をさらわれかけ(顔役段二・段五の詐欺)、大いに怒って暴れる。

さらに元締め段三娘が向かってきたが簡単に負かし、段三娘はかえって王慶が気に入る婿として迎える。段三娘は元々嫁入ったこともあったのだが、一年とたたぬうちに相手を干し殺してしまい、実家に戻って兄弟と共に悪事をはたらき、良家の子弟を何人もだめにしたという人物。新婚の夜、再婚同士の両者が熱戦を展開しているところに捕り手が襲い、親戚を含めて一同は必死で切り抜けて房山の廖立に投じる。廖立は自分が彼らに押さえつけられるのではと恐れて断るが、王慶は廖立を倒せばこの山は手に入ると見て突然斬りつけ、房山を乗っ取る。

王慶は房州を攻めてそこを掠奪し、周圀の村や鎮を次々と攻め、掠奪した。やがて八軍州八十六州県を占領し楚王と号するに至った。(楊一百一〜一百四)<sup>(1)</sup>

ここでは、王慶は父からして悪人であり、その父さえも嘆かせ、父母に口答えする不孝者であり、姦通者であり、従って妻からも怨まれ、(林冲とは逆に)岳父が離縁を迫ってくるような露骨な悪人である。段三娘も再婚者で悪女である(文簡本では段三娘の腕つぶしの強いことは出ているが、再婚のことは書かれていない)。張世開を殺す一段も文簡本では張世開が王慶の些細な手落ちをとがめて明日また五十棒を食らわすぞと言ったのにかつとなつて手を出した、となつており兇器も持っていないが、楊定見本ではあらかじめあいくちを用意しており、張世開らの会話をひ

そかに聞いていて闇から襲つたことになっている。文簡本の方がやむを得ざる、衝動的殺人であるのに対して、楊定見本は王慶の兇悪さを印象づける計画的殺人になっている。房山（文簡本では紅桃山）を乗っ取る一段も、文簡本が廖立の方に非があるように書き、なおかつ廖立は位を讓つて、第三の頭目として納まるのに対し、楊定見本では王慶が一方的に襲い、廖立を殺してしまふ、と、王慶の兇悪さ残忍さが強調されている。さらに、楊定見本では王慶の一派は正義の賊なんぞではさらさらなく、掠奪を行う兇暴な軍団である。王慶の前身が神だったという話は全くなく、母が王慶を生むときに、父が、虎が部屋にうずくまり、獅子がそれをくわえて出ていく、という夢をみたところに僅かにその「異常さ」が暗示されているのみである。

さらに、楊定見本では、文簡本に見えない、次のような段がある。

蕭讓ら三名は病気の宋江を見舞い、さらに陳安撫に命ぜられた石碑を刻むため宛州に向かう途中、賊將糜賚等に捕えられる。荆南の留守司梁永は降伏を勧めるが、蕭讓らは大いに相手を罵る。梁永は彼らが殴られても跪くことさえしないのに怒つて、さらに城門の外でさらしものにし、兵士になぶりものにさせた。これを見て、蕭愴（南朝梁の人物で、身をもつて揚子江の決壊を防ごうとし、奇跡をよんだ）の子孫蕭嘉穗なる義士が大いに怒り、賊を殺すべしという檄文を草し、家々で泣き声が聞こえる（民心は賊から離れている）ことに力を得てこの檄文を夜ひそかに撒き、朝、人だかりができたところで、自ら檄文を読み上げ、人々に呼びかけ、先頭に立つて元帥府を襲い、蕭讓らを助け、城門の守将を斬り殺し、城門を開いて宋軍を迎え入れた。梁永は日頃軍民を虐げ、士卒を鞭打つていたため早くも兵士たちに殺されていた。（楊一百八）

ここでは民間の義士の活躍の場面を作っているのであるが、それは同時に王慶の統治がこのような義士の憤激を買



うような、つまり客観的に「悪い」ものであったことを印象づけることにもなる。蕭嘉穗の蜂起の成功は、一般民衆が王慶（の手先）を憎んでいたことによること、文中でも繰り返して強調されている。

ほかにも宋江軍の将が偵察に出たりした際、宋江の軍が王慶・田虎軍と（他の官軍とも）違って掠奪をしないことで有名であり、歓迎を受けるといふ場面が度々出てくる。つまりこれも、王慶・田虎（及び他の官軍）が「悪」であることを強調することによって、梁山泊軍が（過去においては）「ただの賊ではない、正義の賊」であったこと（現在では「正義の軍」であること）を強調したものと見える。また、楊定見本では、田虎・王慶について「強盗」「草頭天子（泥棒天子）」、田虎・王慶配下の官について「偽\*（官名）」といちいち呼ぶが、これも同様に田虎・王慶を悪の賊軍であることを強調したものと考えられる。

また、余象斗本は、田虎方の女将瓊英と、張清の結婚の顛末を次のように叙す。

瓊英は国舅（田虎の妻の兄）烏利の娘で、石つぶてを飛ばすのがうまく、夫は自分以上の腕前の男でなければならぬと誓っていた。このことを知る降将葉清の手引きで張清は烏利の軍に行き、瓊英と腕くらべをしてみごと勝ち、瓊英の夫となった。早速穆横らの閉じこめられている迷魂洞の秘密を教えてもらい、喬道清の妖術が解かれねばならぬことを知る。公孫勝・喬道清が戦い、公孫勝は兄弟弟子の喬道清になかなか勝つことができない。公孫勝が薊州にいったん戻り、師羅真人から改めて教えてもらった術でかろうじて勝った後（羅真人は喬道清宛ての手紙を公孫勝に持たせたが、喬道清は帰降しなかった）、張清は病が重くなった岳父烏利を医者と共に謀る末、漫薬で毒殺し、烏利が死ぬと、父国舅も亡くなったし、宋軍に投降しようとして瓊英を説得し、喬道清をも誘って宋軍に帰する。のち宋江が詫びを兼ねて、瓊英に真相を説明した。（余象斗本卷十九）

楊定見本では以下のようなのである。

瓊英は国舅鄔梨の養女で、もとは仇申なる資産家の娘であったが、父は盜賊に殺され、母は行方しれずとなり、家令の葉清夫婦に育てられた。鄔梨がこの地を占領した際、子の無い鄔梨夫妻が目をつけ、養女としてかわいがつて育てた。その後、瓊英の実の父母を殺した盜賊とはほかならぬ田虎であり、母は田虎に妻になるよう迫られ、身を投げて死んだことが判明し、父母の復讐を誓い、武芸を神人から教えられる夢を見、起きるとひそかにそれを練習して身につけるといふ日々が続いた。ある晩うたた寝をして、夢で青年將軍から石つぶての投げ方を習い、その將軍を連れてきた書生が「この將軍はあなたと結婚する定めの人だ」といったので恥ずかしくなつて袖で顔を隠そうと手を動かしたとたん、机の上の鉢を払い落とし、その音で目が覚めた。(実は瓊英の夢に出てきた青年將軍は張清で、張清も一人の美人につぶてを教えた夢を見、恋患いで病氣となつていた。)翌朝試してみると果たして百発百中であつた。この噂はあつという間に広まり、鄔梨は宋軍との戦いに際して瓊英を出し、勝利を得ていた。葉清はこのように瓊英が田虎側に手柄をたて続けた場合、宋が田虎を破つた際に誅戮されてしまうと恐れ、ひそかに瓊英の事情を打ち明け、宋側に内応を申し出る。偽りかどうか迷う宋江に、先頃張清の病氣を診、真因を問いつめた安道全が、信用できるであろうことを助言し、張清は安道全の弟を装い、葉清の手引きによつて田虎軍に潜り込む。張清はその武芸を買われて將軍となり、瓊英と結婚する。その夜二人は互いに身分を明かし悲願を語り合ひ、二日後、鄔梨を毒殺する。この二人のはたらきにより田虎は捕えられ、東京に送られて死刑になる。瓊英は父母の肖像の前に田虎の首級を供えて大いに哭し、都の人々もその姿に感泣した。(楊九八く一

余象斗本では、瓊英は田虎の歴とした親戚であり、実の父が毒殺された事に気付かず、父が死ねばあっさりとは父の仇である）夫の言うことを聞いて宋に帰順するし、張清は結局自ら正体を明かさずに瓊英から情報を仕入れ、岳父を毒殺して妻を投降させる。張清のやったことは間諜としては当然の行為なのだが、いささか無条件では賞賛し難い、正義とは言いかねる側面も持つ。瓊英の寝返りにはそうすべき積極的な理由がなにもない。これを楊定見本では、鄔梨は養父で、実は田虎は父母の仇だったという逆転を行って、正当化し、むしろ典型的な「孝女」の美談としたのである（田虎が実は瓊英の仇だと知っているから張清の方も初めから自分の正体を明かすことができ、妻を騙しておいて妻の父を殺すという後味の悪いまねをしなくて済む）。これは合理化の一種であると同時に、瓊英・張清といった梁山泊側の人物の美化であり、それと同時に田虎や鄔梨が殺されて当然の悪人であることを強調する効果を持っている。

以上のように、文簡本の王慶・田虎、およびその配下の将は、梁山好汉と質的に異なった、「悪人」「悪玉」ではなく、梁山泊の好漢と同様の、同質の人物として描かれており、従って宋江軍との戦いは同質者同士の戦い（の大きかりになったもの）として位置づけられることになる。彼らは宋江側の有力人物より強いこともあり得、宋江側に加われば同じ兄弟分として遇せられる。すなわち、両者は戦うが、「対立」はしていない、ないしはその対立はかりそめのものにすぎない。そして、絶対的な「悪玉」でない以上、田虎や王慶に対する忠節というものもあり得るし、その忠節は敵ながらあつばれと賞賛さるべきものである。これに対し、楊定見本においては、田虎・王慶及びその手先は、梁山泊の好漢達とは対照的な、悪人であり、悪を行う兇悪な賊として描かれ、そのようなものに忠節を励む者

なぞおらず、専ら田虎・王慶を裏切つて宋側に投降する人物が増やされ、また肯定的に描かれる。田虎・王慶軍と宋江軍との戦いを、善・正義が悪を打ち懲らすという図式、「正義の宋江軍vs悪の賊軍」という対立の構図として見る見方は、楊定見本による改変によつて作られたものだと言えよう。

(二) 武松・蔣門神故事における「善玉vs悪玉」

『水滸伝』武松故事の後半部。武松は配流先の孟州牢城で、思ひのほか丁重な扱いを受ける(二一八)。管營の息子施恩が、以前顔役をしていた快活林を蔣門神(蔣忠)なる者に奪われ、武松に取り戻してもらおうと思つていたためであつた。(以下、引用文中の( )内は引用者による。また、……は引用者による省略を示す)

1 往常時、小弟一者倚仗隨身本事、二者捉着營裡有八九十箇棄命囚徒、去那里開着一箇酒肉店、都分與衆店家和賭錢兌坊裡。但有過路妓女之人、到那里來時、先要來參見小弟、然後許他去趁食。那許多去處、每朝每日都有閑錢、月終也有三二百兩銀子尋覓、如此撰錢。……那廝……原來有一身好本事、……因此來奪小弟的道路。小弟不肯讓

他、乞(吃)那廝一頓拳脚打了、兩箇月起不得牀。……(二一九)

という次第である。武松は、

2 我……平生只要打天下硬漢、不明道德的人。(二一九)

と、胸をたたいて引き受け、もつと養生してからではどうかとか、二日酔いではまずいのでは、などという施恩らの氣遣いを笑い飛ばし、道々「三無くんば望を過ぎず(三杯飲まなければ、飲み屋のしるしであるさかばやしを通り過ぎない)」を実行して、へべれげに酔つて快活林に到着する。蔣門神のすがたは、

3 形容醜惡、相貌粗疎。一身紫肉横生、幾道青筋暴起。黃髯斜起、唇邊撲地蟬蛾。怪眼圓睜、眉目對懸星像。坐下猙獰如猛虎、行時彷彿似門神。(二一九)

武松はわざと蔣門神の妾である飲み屋のおかみに酌をさせるとからみ、酔っぱらいと思つてなめてかかった蔣門神をさんざんに打ちのめす(二一九)。武松は、快活林の主だった者たちを呼んで、その前で蔣門神に施恩に詫びをいれさせ、

4 我從來只要打天下這等不明道德的人。我若路見不平、眞乃拔刀相助、我便死了不怕。(三十)

と宣言し、蔣門神に孟州から立ち去るよう約束させ、施恩は快活林の顔役に返り咲く。このことをうたつた詩に、  
5 惡人自有惡人魔、報了冤讐是若何。從此施恩、心下喜、武松終日醉顏酡。(三十)

しかし、蔣門神は上司の張団練を通じて、都監張蒙方に依頼し、武松を罫にはめる。張都監がまず親切ごかしに武松を身辺に引き取り、十分眼をかけてやつて恩を売り、養女玉蘭を武松に娶せると約束までした上で、いつわつて泥棒騒ぎを起こし、武松が忠義だてのしどころと飛び出したところを、泥棒だと捕えさせたのである。武松が不在の間に彼の荷物には「盜品」が詰め込まれており、これが証拠となつて武松は死囚牢に入れられる。施恩の奔走と、公正な葉孔目のおかげで武松は死刑を免れ、恩州に流罪となる。蔣門神は護送役人を抱き込み、弟子に命じてなおも武松の命を狙うが、それと察した武松は先手をとり、飛雲浦で護送役人二人と刺客二人を殺す(三十)。さらに張都監らが酒宴を開いている鴛鴦楼にとつて返して、張都監、張団練、蔣門神のほか、馬丁、張都監の従者二人、張都監夫人、玉蘭、侍女・小間使い七人、計十五名(うち女性九名)を殺害し、壁に「殺人者打虎武松也」と血で書き残して立ち去る。武松は逃げる途中、張青・孫二娘夫婦と再会し、その提案で行者姿となり、二竜山に落草することとする(三

一)。

ここに、「武松（・施恩）vs 蔣門神（・張団練・張都監）」の「対立」を見て取り、また、それを「善玉vs 悪玉」の対立として解釈することは、ある程度可能である。さらにその悪玉が「貪官汚吏と結託した悪霸」であると解釈することさえ不可能ではない。しかし、「善玉vs 悪玉」の対立として解釈するにはあまりにも「夾雑物」が多いのも事実である。2、4などの武松の結構な大看板にも関わらず、施恩と蔣門神の争いは、自らの臂力に頼って渡世する者同士、なわばり争いという面を拭うことはできない。蔣門神は自らの腕力と張団練の後ろだてで暴力的に快活林を奪ったかもしれないが、1に見えるように、施恩も、自らの腕力と父親の配下の囚人たちの後ろだてで、つまり暴力で快活林を支配し、縄張り内の店から、また流れ者の妓女たちからあがりをとって（「参見」といっても挨拶だけすればよいということはあるまい）、つまり弱い者いじめをやって多くの金を得、そして武松の暴力に頼ってこれを奪回したのである。武松が助けた施恩のやったことと、蔣門神のやったこととは、質的な相違は読み取れない。武松が施恩を助けて蔣門神を打倒したのは、正義が悪を懲らしたのでは別になく、縄張り争いする二者のうち、義兄弟であり厚く遇してくれた施恩に武松が加勢し、蔣門神より武松の方が強く打ち勝った、ということに過ぎない。5の詩では、蔣門神も武松も等しく同じ範疇のものであり（この場合、「悪」は「悪い」のほか「つよい」の意も含むかも知れない）、武松がうわてであったとするのみで、善が悪を懲らしたとは別に言っていない。そして、鴛鴦楼での武松の大殺戮は、蔣門神・張都監・張団練といった仇ばかりでなく、全く罪の無い人も容赦なく殺しており、正義の殺人とは言い難い側面をもっている。すなわちここでは、蔣門神は一応悪玉のようではあるが、施恩や武松と質的な相違がほとんどなく、同質者であるという面をそなえており、武松は正義を掲げ、一見正義のヒーローのようにも見え

ながら、その「正義」はいささか怪しく、さらには兇暴な、正義抜き、傍若無人、凶悪野蛮な横行性をも、正確にそなえている<sup>13</sup>。

楊定見本は、田虎・王慶の段の挿入や、宋江が閻婆惜を娶る段の移置などを別にすると、基本的には容与堂本との一致率が非常に高く、詩や韻文（及び地の文）に手を加えたり、削除したり、挿入したり、総じて言えばごく少量の改変を行っているだけであるが、この少量の改変にはある傾向が見て取れる。

蔣門神登場の場面の、3の韻文は、

6 形容醜惡、相貌粗疎。一身紫肉橫鋪、幾道青筋暴起。黃髯斜捲、唇邊幾陣風生。怪眼圓睜、眉下一雙星閃。真是神荼鬱壘像、却非立地頂天人。（楊二九）

と、微妙に改変され、3では単に蔣門神の醜惡で強そうな容貌をうたい、「まさに門神」と称していたものが、6では「立地頂天の人ではない」、最初から悪人であると宣言されてしまうのである。5の詩が、比較的単純に、快活林を取り戻し得た施恩の喜びを述べるのに対し、楊定見本では

7 奪人道路人還奪、義氣多時利亦多。快活林中重快活、惡人自有惡人魔。（楊三十）

と、快活林を取り戻した武松の行為を「義氣」の行いとして位置づけている。他にも、武松が牢城宮の巨石を軽々と持ち上げて人々を驚かせた一段の後に詩を付し、

8 神力驚人心膽寒、皆因義勇氣彌漫。掀天揭地英雄手、拔石應宜似弄丸。（楊二八）

と、武松の「義勇」を強調する。また、武松が鴛鴦楼の大殺戮後、張青の手下に誤って捕えられ、ばらされかけて

「自首して出ればよかった、死刑にはなっても清名を世に残すことができたのに」と思った、という箇所では詩を挿入し、

9 殺盡奸邪恨始平、英雄逃難不逃名。千秋意氣生無愧、七尺身軀死不輕。(楊三一)

「英雄」武松は「難を逃れるが名を逃れぬ」とすかさずほめ、「生きては愧無く」と、その正しさを強調し、鴛鴦楼で殺された人々を「奸邪」としている。ここでは武松が例えば馬丁や小間使のような罪の無い人々をも殺戮したことは切り捨てられている。

すなわち、楊定見本では、その改変部分において、蔣門神らを悪人、「奸邪」とし、武松を「義勇」「義氣」の人として、両者の争いを、質的に異なる「邪悪な悪玉と正義の善玉の対立」として見ることを要請していると言えよう。この時、武松の兇暴さ、蔣門神と武松（・施恩）の同質性は、それに眼を向けないように要請されるのである。

さらに、沈環『義俠記』<sup>(14)</sup>に出てくる武松と蔣門神の争いを見てみよう。『義俠記』は、『水滸伝』中の武松の物語を劇化したもので、粗筋はほぼ小説『水滸伝』第二十三回〜第三十一回に一致するが、相違も随所に見られる。『義俠記』における蔣門神の話の粗筋を、『水滸伝』との相違を主として挙げると次のようになろう。

『水滸伝』では、施恩が快活林を蔣門神に奪われるくだりは施恩の口から語られるだけであるが、『義俠記』においては、「失霸」<sup>(15)</sup>「二二」で、それを具体的に演じ、蔣門神が施恩を打ち倒した上、施恩のところに挨拶にきていた妓女を蔣門神が無理矢理自分のものにする次第が描かれる。施恩からこの次第を聞いた武松が、蔣門神を倒す（取威）<sup>(16)</sup>「二五」）。この武松は、



10 腌臢乞丐流、這敢恁無賴。(二二五)【撲燈蛾】

と蔣門神を罵り、施恩らは武松を

11 到處除民害。(二二五)【撲燈蛾】

と賞賛する。また、「再創」(二二六)は、『水滸伝』には無い話で、蔣門神が、女性道士ばかりの道観、清真観にありこみ、道姑にはからむ、賈氏(武松の許嫁で、武松を尋ね孟州に行く途中、孫二娘の紹介でこの道観に世話になっている)にはちよつかいを出す、と道観の清浄を乱し、参拝に来ていた孫二娘が怒り、蔣門神を打ち倒す、とされている。かくして蔣門神は復讐を張都監・張団練に依頼し、武松は泥棒の濡れ衣を着せられて再び流されることになる。送りに来た施恩から、快活林は再び奪われ、施恩の父は怒りの余り死んだと聞かされる(現行の『水滸伝』においては、施恩の一家は武松が鴛鴦楼の殺人事件を起こした後、犯人捕縛の責めを負わされて逃げだし、江湖上を渡り歩いているうちに父母が亡くなった、としており〔五七〕、施恩の父が死んだ直接の責任は蔣門神にはない)。武松は飛雲浦で護送役人と張団練らがよこした刺客の計四人を殺し、張都監・張団練らの差し金であることを知って孟州にとつて返し、張都監・張団練・蔣門神の三人(のみ)を殺して血で「殺人者打虎武松也」と書き付けて去る。

以上、粗筋の上での相違を簡単に見ただけでも、好色・兇暴な蔣門神の「悪」が強調され(一方、女の孫二娘に負かされてしまうくらい弱い〔二六〕など実力の点では矮小化され、雪を見て字数がそろっているだけの滅茶苦茶な詩を作って自己満足する〔二五〕など、道化役としての性格も付与されている)、武松の鴛鴦楼の殺人は、仇にのみ復讐する「道理の通った殺人」へと修正されて、鬼神のごとき彼の兇暴な側面は取り去られ、また「民の害を除く」武松の正義が強調され、善玉・悪玉の色分けがはっきりしていることがわかる。ここでは、「悪の蔣門神を懲らしめる

正義の武松」という対立の構図がきわめて鮮明となっている。

(三) 随所に見られる「善玉 vs 悪玉」

このほかにも、断片的ながら、容与堂本の、好漢の兇悪な側面を認める記述を、楊定見本で抹消したり和らげたりした例、敵役の悪を強調することによって好漢を正当化した例が幾つか指摘できる。

戴宗が宋江に李達のことを説明する。

12 在江州牢裏、但吃醉了時、却奈何罪人、只要打一般強的牢子。我也被他連累得苦。專一路見不平、好打強的人。

以此江州滿城人都怕他。(三二八)

この場面の、李達をうたった詩、容与堂本では、

13 天性由來太惡粗、江州人號李兇徒。他時大展屠龍手、始識人中大丈夫。(三二八)

となっており、彼の兇暴さ、「江州滿城人都怕他」という側面も、隠されることなく認められている。これはまた、すさまじい破壊のエネルギを放射し続け、悪人も罪無き人も無差別に殺す李達の形象ともよく合う。しかし、この詩は楊定見本では、

14 賄賂公行法枉施、罪人多受不平虧。以強凌弱真堪恨、天使拳頭付李達。(楊三八)

と、汚吏批判を盛り込み(戴宗は確かに、「却奈何罪人、只要打一般強的牢子。……專一路見不平、好打強的人。」とは言っているが、罪人たちは悪役人に陥られたものだとまでは明言していない。また、戴宗のせりふの範囲では、李達が張り合おうとする「強き」は、官や吏ではなく、李達と同格の「牢子」である)、賄賂とりの役人に陥られ

た罪人たちの味方となる、「弱きを助け強きをくじく」李達の正しさを強調している。

また、第七四回、李達は泰安州の帰りにまず寿張県の役所に闖入する。知県は逃げてしまい、県の役人たちは黒旋風が来たと聞いて戦々兢兢、丁重にお出迎えする。李達は知県の衣服を着て威儀をただし、胥吏らに命じて原告と被告をでっち上げさせ、裁判を行う。

15 這箇告道：「相公可憐見、他打了小人。」那箇告：「他罵了小人、我纔打他。」……李達道：「這箇打了人的是好漢、先放了他去。這箇不長進的、怎地吃人打了？與我枷號在衙門前示衆。」〔七四〕

李達は原告がさらし者にされるのを見届けると、知県の服装を身につけたまま、すたすたと立ち去り、やがて寺子屋に入る。

16 李達掲起簾子走將入去、嚇得那先生跳窗走了。衆學生們哭的哭、叫的叫、跑的跑、躲的躲。李達大笑出門來、……〔七四〕

この一段の騒ぎを叙した後、容与堂本は、

17 牧民縣令古賢良、想是腌臢沒主張。怪殺李達無道理、琴堂鬧了鬧書堂。〔七四〕

という詩をおいている。李達は「道理無き」者であり、被害者は役所や寺子屋の方である。これに対し、楊定見本は、18 牧民縣令每猖狂、自幼先生教不良。應遣鐵牛巡歷到、琴堂鬧了鬧書堂。〔楊七四〕

とする。悪いのは「猖狂」の県令や「教不良」の先生であり、李達にこのようにさせるべきだというのだ。しかし、上掲の範囲でもわかるように、李達の行動は、このように暴れてみんながおどおどするのが面白い、といったていのものであり、別に役人や先生に倫理的憤りを覚えて闖入した訳ではない。李達の行動のこうした傍若無人さが、「善」

として宣揚されているわけでもなく、怒りをもつて告発されているわけでもなく、豪傑の無邪気ではた迷惑な楽しみぶり、周囲の愚かで滑稽な慌てぶりが、淡々と距離をもつて描かれているところに、「善良な市民などまるで眼中にない、あのような（ほんらい賊的である／手のつけられぬ厄介もの／人災の魔人）豪傑のイメージにしてはじめて、役人を手玉にとったりする行為に現実感覚が伴う」という側面が見てとれよう。楊定見本の詩14、18は、この李達の兇暴さ、「道理のなさ」を貪官汚吏批判によって消し去り、「悪い役人をやつつける正義の好漢」の図式に強引にすり寄せるような解釈を提示しているが、かなりこじつけくさい。そして、このように解釈すれば、こうした「現実感」は失われてしまうのである。

また、阮小五が登場した場面の韻文、容与堂本の

19 面皮上常有些笑容、心窩裡深藏着鳩毒。(一五)

という、陰險さ・兇悪さを連想させる描写が、楊定見本では

20 面上雖有些笑容、眉間却帶着殺氣。(楊一五)

と和らげられている（少なくとも陰險な感じは薄れる）。

安道全が妓女李巧奴におぼれてなかなか梁山泊に同行しようとしなのに業をにやした張順が、李巧奴・やりて婆を殺した場面、容与堂本では、

21 久戀烟花不肯休、臨行留滯更綢繆。鐵心張順無情甚、白刃橫飛血漫流。(六五)

というなかなか凄惨な詩が入っている。ここでは張順は「無情甚」とされ、彼の行った凄惨な殺人の場面をことさらに繰り返すことに別に抵抗はないようである。楊定見本では、

22 紅粉無情只愛錢、臨行何事更流連。冤魂不赴陽臺夢、笑殺癡心安道全。〔楊六五〕

と、張順に関する記述は全くカットされ、安道全を嗤っている点は同じであるが、「紅粉（売女）」の悪口が加えられている。

時遷が鶏を盗んだことがもとで祝家荘とトラブルとなり、楊雄・石秀が梁山泊に投じて事情を訴えたところ、逆に晁蓋が二人を斬るように命じた場面では、容与堂本は

23 楊雄石秀訴衷情、可笑時遷行不賊。惹得羣雄齊發怒、興兵三打祝家莊。〔四七〕

と、いきさつのまとめと将来の予告を淡々と述べており、また、「時遷が良からぬことをした」と認めているながら「群雄が怒」って祝家荘を攻撃するのは別に理不尽とも思っていないかのごときであるが、楊定見本では、

24 楊雄石秀少商量、引帶時遷行不賊。豪傑心腸雖似火、綠林法度却如霜。〔楊四七〕

である。楊定見本は、時遷が悪いにも関わらず群雄が怒って祝家荘を攻撃する将来の予告はカットして、梁山泊の規律の正しさを述べ、正義の集団である点を強調している。

晁蓋らが梁山泊に上って最初に官軍を撃退し、その将黄安を捕えた場面では、容与堂本では、

25 水滸英鋒不可當、黃安捕捉太講張。戰船人馬俱虧折、更把何顏見故郷。〔二十〕

と、梁山泊軍が黄安をさんざんに打ち負かしたことをうたい、黄安を嗤っている詩であった。官軍を撃退し、その將を山に引き上げようするのは、喝采さるべきことで、別に悪いこととは思われていないようである。楊定見本ではこれが、

26 堪笑王倫妄自矜、庸才大任豈能勝。一從火併歸新主、會見梁山事業新。〔楊二十〕

と、前の狭量な寨主王倫をそしり、晁蓋が主となってから梁山泊の「事業が新たになった」ことを称える詩になっていて、黄安のことには一言も触れない。官軍の將黄安を打ち破る、梁山泊軍の「反抗」をことさらに目立たせるようなことはせず、王倫に比して晁蓋らの正しさに眼を向けるように配慮されていると言えよう（この黄安について、容与堂本はその後全く触れないが、楊定見本では宋江が梁山泊に入った時、宋江の口から晁蓋にその消息を尋ねさせて、その後半年して病死した、という結末を与えている。これも、話をきちんと照応させるといふことのほかに、梁山泊好漢の手が汚れていないことを示す効果があるう）。

また、容与堂本においては単純な人物描写・情景描写であつたものが、楊定見本では善悪の価値判断が持ち込まれた記述になっている、という例もある。

一 (二) で取り上げた蔣門神の描写 (3、6) もその一例であるが、ほかに、宋江を陥れた劉高夫人の登場の場面、容与堂本では

27身穿縞素、腰繫孝裙。不施脂粉、自然體態妖嬈。懶染鉛華、生定天姿秀麗。雲鬟半整、有沈魚落鴈之容。星眼含愁、有閉月羞花之貌。恰似嫦娥離月殿、渾如織女下瑤池。(三三二)

と、普通のいわゆる佳人の描写であり、たとえに出た美女も織女・嫦娥で、ただひたすら美人であることをいつている。別に悪いイメージはない。これに対し、楊定見本は、27の◇内が

28雲含春黛、恰如西子顰眉。雨滴秋波、渾似驪姬垂涕。(楊三三二)

に改変され、西施はともかく（とはいえ、この美人によって男が破滅したという側面はあるわけだが）、「驪姫が涙を

流すのにそっくり」というのは、この女が悪であることを示したものであろう。

また、宋江が反詩を書いたと知府に告発し、死刑にするよう進言した黄文炳の家を好漢たちが襲い、火をつけた場面では、容与堂本は、

29 黒雲匝地、紅焰飛天。倅（卒）律律走萬道金蛇、焰騰騰散千團火塊。狂風相助、雕梁畫棟片時休、炎焰漲空、大  
厦高堂彈指沒。へ驪山頂上、多應褒姒戲諸侯。赤壁坡前、有若周瑜施妙計。丙丁神忿怒、踏翻回祿火車。南陸將

施威、鼓動祝融爐冶。咸陽宮殿焚三月、卽墨城池縱萬牛。馮夷捲雪罔施功、神術樂巴實難救。〔四十一〕

と、火事のものすごさをやたらと故事を用いて描写することに熱心だが、楊定見本では、◇内が

30 這不是火、却是：文炳心頭惡、觸惱丙丁神。害人施毒焰、惹火自燒身。〔楊四一〕

と、故事の大部分は削除され、その代わりに黄文炳の悪なること、この災いは自ら招いたものであることを主張している。

同様な例として、林冲を焼き殺そうと、高俅の遣わした陸謙・富安らが放った火でまぐさ場が焼けている場面の描写がある。容与堂本では

31 一點靈臺、五行造化、丙丁在世傳流。無明心内、災禍起滄州。烹鐵鼎能成萬物、鑄金丹還與重樓。思今古、南方

離位、災惑最爲頭。綠窗歸焰燼、隔花深處、掩映釣漁舟。鑿兵赤壁、公瑾喜成謀。李晉王醉存館驛、田單在卽墨

驅牛。周褒姒驪山一笑、因此戲諸侯。〔十〕

と、やはり故事の引用に力点がかかっているのに対し、楊定見本は、

32 雪欺火勢、草助火威。偏愁草上有風、更訝雪中送炭。赤龍鬪躍、如何玉甲紛紛。粉蝶爭飛、遮莫火蓮焰焰。初疑

炎帝縱神駒、此方芻牧。又猜南方逐朱雀、徧處營巢。誰知是白地裏起災殃、也須信暗室中開電目。看這火、能教烈士無明發。對這雪、應使奸邪心膽寒。〔楊十〕

と、野暮つたい故事の大量の引用をやめたほか、この火事がやがて「烈士」林冲の怒りを招き、「奸邪」を殺すことになることに注意を喚起している。

また、方臘がついに敗れ、その「宮城」が炎上した場面でも、容与堂本は、

33 黑烟罩地、紅焰遮天。金釘朱戶灰飛、碧瓦雕簷影倒。三十六宮煨燼火、七十二苑作飛灰。金殿平空、不見嵯峨氣象。玉堦迸裂、全無錦繡花紋。金水河不見丹墀御道、午門前已無臣宰官僚。龍樓移上九重天、鳳閣盡歸南極院。

〔九十九〕

と、火事のものすごさを描写するのに意を用い、また、方臘の統治が「悪」であることをさらに強調するような言辞は見られない。これはまた、一（一）で指摘した、文簡本の、田虎・王慶は必ずしも悪ではなく、田虎・王慶への忠節も認め、称揚する、という態度と通じるところがあると考えられる。これに対し、楊定見本では、

34 黃屋朱軒半入雲、塗膏鬻血自訶訶。若還天意容奢侈、瓊室阿房可不焚。〔楊一百十九〕

と、詩となり短くなっているほか、方臘の行いを「塗膏鬻血」と悪行とし、その宮城が燃えるのを瓊室・阿房宮の炎上、即ち悪政崩壊の象徴とたとえる、など、極めて倫理判断というか善悪の判断の入り込んだ詩となっている。方臘を「不正義の賊」として位置づける姿勢が鮮明に表れていると言えよう。

また、好漢の敵対者の「悪」を、新たな詩の挿入によって、楊定見本がより増幅している例も指摘できる。



潘金蓮の登場から西門慶・潘金蓮の姦通・武大殺しの段でも、計六首の詩が新たに入れられているが、それらはいずれも、潘金蓮・西門慶・王婆をそしつたものである。潘金蓮を「淫婦」、西門慶を「奸漢」「姦夫」とよび、彼らの結びつきを「淫」「姦」、王婆の取り持ち行為を「勾引」と表現する。また、「男女は筵を同じくせず」、「叔嫂の言を通ずるは礼の厳しく禁ずるところ」とか、説教するの忘れない。武松が旅立ち前に「垣根がしつかりしてれば犬は入つてこない」といったのが気に障つて武松を罵つた潘金蓮が、西門慶との酒席の同席を拒否しなかつた場面では、特に二首の詩をいれ「それぞれ、武松の言葉を忘れたかね、犬がかきねのそばに来たぞ」「遠からず犬が垣根の中で寝るだらうよ」と、手厳しく指摘している。こうした詩の増加により、潘金蓮・西門慶の「淫」「毒」はリフレインされ、より強調された形で読者の頭に残るようになっていく。

宋江が閻婆惜を娶つてから殺すまでの段も同様で、閻婆惜・張文遠をそしる二首の詩が増えている。前者を挙げる

と、  
35 花娘有意隨流水、義士無心戀落花。婆愛錢財娘愛情、一般行貨兩家茶。（楊二一）

また、高俅の従弟高廉の妻（その弟殷天錫はごろつきで、柴進の叔父柴皇城の庭園・屋敷をよこせとゆすり、かつとなつた李逵に殺された）が弟の仇とばかり、夫高廉に柴進を拷問させた場面では、柴進の受難を述べる詩が挿入されているが、これにも「脂唇粉面は毒たること蛇の如し」の句があり、高廉の妻への批判も加えられている。

ほかに、高俅が蹴鞠がきつかけで出世したことを叙した後、

36 不拘貴賤齊雲社、一味模稜天下圖。擡舉高俅毬氣力、全憑手脚會當權。（楊二一）

という詩を挿入して、蹴鞠で出世したことをそしり、また、高俅の養子高衙内が高好きで花花太歳と呼ばれて嫌われ

ていることを叙した後に、

37 臉前花現醜難親、心裏花開愛婦人。撞着年庚不順利、方知太歳是凶神。〔楊七〕

という詩が挿入される、という具合である。

また、宋江が江州に配流される途中、梁山泊の好漢が助けて仲間入りさせようとしたところ、堅く断り、護送役人を殺すと偽って刀を借り、それで自殺しようとした場面で挿入された詩、

38 有罪當官不肯逃、逢人救解愈堅牢。存心厚處生機巧、不殺公人却借刀。〔楊三六〕

や（実際には宋江は一度逃がっているのだが）、前述の9、後述する81、のように、積極的に好漢の正義、善なることを強調し、ほめたたえる記述を増加させた例もあり、また、梁山泊集団全体について、それがただの賊ではなく、正義の集団であることを主張する改変も見られる。例えば、祝家莊を破って梁山泊に戻る帰途の凱歌は、容与堂本では

39 雲開見日、霧散天清。早苗得時雨重生、枯樹遇春風再活。一鞭喜色、如龍駿馬赴梁山。滿面笑容、似虎雄兵歸大寨。車上滿裝糧草、軍中盡是降兵。風捲旌旗、將將齊敲金鑼響。春風宇宙、人人都唱凱歌回。〔五十〕

と、ひたすら勝利の喜びをうたっているのに対し、楊定見本では、

40 盜可盜、非常盜。強内強、眞能強。只因滅惡除兇、聊作打家劫舍。地方恨土豪欺壓、鄉村喜義士濟施。衆虎有情、爲救偷鷄釣狗。獨龍無助、難留飛虎撲鷗。謹具上萬資糧、填平水泊。更賠許多人畜、踏破梁山。〔楊五十〕

と、梁山泊がただの賊でない、特別の存在であること、祝家莊は人々を圧迫する土豪であつて（実はそれを裏付ける描写は地の文には別にないのだが）、これを破ったのは「悪を滅ぼし兇を除く」ことであると主張し、祝家莊と梁山

泊の戦いを「悪の土豪たる祝家莊をやっつけ、人々を救った正義の梁山泊軍」として性格づけている。

梁山泊の職掌分担を示した名簿の後におかれた長い韻文（七十一）は、容与堂本では、その職掌に応じて百八英雄の名を機械的に羅列した部分が多くを占め、あとはその団結心（交情はまことに股肱に似、義気は真に骨肉に同じ。／人々力を戮し箇々心を同じくす）と、抽象的に「仗義疏財」「替天行道」を掲げる程度で、その理念性はそれほど濃くなく、あるとしても梁山泊の堅い団結に重点がある。楊定見本では、「八方共域、異姓一家」とまず提示し、彼らの結びつきが貴賤に関わらず、その能力に応じて仕事を与えられ、親疎を分かつ様々な性格のものが一緒に生活することを強調して、「理想境としての梁山泊」という理念がはつきり示されており、さらに末の句で招安を望んでいることを示している。また、梁山泊軍が集団で行動する場合に「過ぎたるどころ、いささかも犯すことがなかった」という類の記述は、容与堂本にも見られたが、楊定見本で増加している（特に挿増部分では頻繁に現れている）。

楊定見本の批評（李卓吾評を称するが真筆との確証はなく、李卓吾評を称する評は複数あり、また本稿は李卓吾の思想を追究するのが目的ではないので、便宜的に楊定見本評と称する。楊定見の評という意味ではない）は、基本的に、楊定見本における本文の改変と同じ方向性をもつが、こうしたいささかとつてつけたような感もある、梁山泊（或いは好漢）の正義を述べた記述も、大いに取り上げられ、称揚の対象となっている。例えば、祝家莊を破った後、鍾離老人の徳によつて掠奪をせず、糧食を与えたという記述（五十）を称揚し、青州を破った際、民衆を害することを禁じたという記述（五八）を、

41 只二句可定天下。

と称揚し、華州を破り少華山の史進等も合流して共に梁山泊へ帰る途中、「通った州県ではいささかも犯すところになかった」という記述〔五九〕を、

42 此兩句的精神主意屢屢提出、與招安語相映、此是一傳根本。

と称揚している。また、晁蓋が主となった後の梁山泊で、晁蓋が「金帛財物だけをうまくとるのだ、商人の命を殺めてはならぬ」と命令した、という記述〔二十〕も

43 殺人放火的人有此等存心叮囑、方是忠義之根本。

と称揚している。また、呉用が阮氏兄弟を仲間にしようと思ひ、晁蓋に提起したときの言葉、「義胆が体を包み、武芸は人に抜きんで、たとえ火の中水の中、生きるも死ぬも一緒という人です」〔十五〕を

44 寫出三阮根本、方與尋常合夥者迥別。

と評し、梁山泊に晁蓋らが入り、林冲が王倫を殺して晁蓋を主につけ、呉用・公孫勝をも自分の上位につけようとした時、公孫勝が（形式的に）遠慮しようとしたせりふ、「自分は濟世の才もないのにどうして上位を占められましようか」〔二十〕を

45 都以濟世爲志、所以與尋常綠林中人不同。

と評するなど、梁山泊及び梁山好漢を、ただの賊とは違ふ、特別の、正義の賊として位置づける方向性も見られる。

こうした、楊定見本の改変部分や楊定見本評の方向性は、余象斗本の評（以下余象斗評と称す）の一部に見られる

論理と対照させるとより鮮明になる。余象斗評では、魯達が出家してから、酒や生臭物を食べたとききりに思うのは、

46 他迺一天星降世、安能吃齋乎。(巻一)

酔つて武術の練習をして寺のあずまの柱を壊したのは、

47 非酒醉、迺武夫之常事矣。(巻一)

寺で乱暴したのは、

48 智深迺一天星、故使他如此、而後上梁山入夥。(巻一)

という具合で、全て天の星であり、運命がそうなっており、大丈夫であるが故に当然のこととされる。ここで注意すべきなのは「当然のこととされる」のであって、「正しいこととされる」のではない、ということである。宋江が閻婆惜を殺したのも、

49 宋江到此、須是命運乖蹇、亦是天使入泊之機耳。況宋江乃義勇之人、豈肯耳受一賤婦之氣、而所以殺婆惜、大丈夫當如此。(巻五)

と、運命であり、大丈夫として当然のこととされる。李逵が祝家莊との戦争に臨んで、たつぷり殺せるぞと勇む場面では、

50 李逵聞殺便喜、此若三國翼德之性無異矣。(巻十)

と、これも恐らく批判ではなく賞賛の語気であろう、ともかく李逵の殺人嗜好は忌むべきものとも、正当化すべきものとも思われていないらしい。好漢の、必ずしも正しいとは言いかねる乱暴、兇悪な行為は、「正しい」という主張、

正当化のプロセスを経ずして、「大丈夫」「天の星」として当然のこととされるのである。

以上に見るように、楊定見本の本文、特に詩・韻文の微妙な改変、新たな詩の挿入など、及び楊定見本評においては、好漢の兇悪な側面を抹消したり目立たぬようにし、或いはその正義を強調し、或いは敵役の「悪」「毒」を強調して、好漢と敵役の敵対関係が「善玉vs悪玉」の対立の図式として読まれるように要請する、かなり顕著な傾向が存在する。この時、容与堂本における比較的ニュートラルで価値判断を含まない描写、好漢の兇悪な側面を認めた記述、官軍への正面切つての対抗を賞賛し、弱い官軍を嘲笑する記述、いわゆる道徳的な「正義」より堅い団結心を重視した梁山泊の兄弟結合の原理などは、或いは消し去られ、或いは後景に退かされ、眼を向けないように要請されている。これはまた、余象斗評の一部に見える、正当化を経ずに好漢の乱暴・兇悪を「大丈夫として当然のこと」とし、あっさり肯定してしまう論理、文簡本本文に見える、田虎・王慶のような「賊」及びその配下の者をも梁山泊好漢と同様に扱う態度から遠く隔っている。

## 二 「正義の好漢vs悪の貪官汚吏」の対立の構図

(一) この構図は『水滸伝』全体を貫徹しているか

『水滸伝』中の豪傑は全体として民に代わつて天下の不義を討つ底の頼み甲斐を保持しつつ、個々には傍若無人、凶悪野蛮な横行性をも、正確にそなえている。たとえば、『官逼民反』（官が圧迫するから民は反する）とは実に立派

な決まり文句であるが、めぼしい豪傑はどうやらほかならぬ豪傑的気力そのものに導かれて続々『落草』する様子で、動機はおおむね殺人だが、殺され手が役人である場合はむしろまれだ。そうすると『官逼』の方も少々問題で、……つまり『官逼民反』的なものは、小説の主として意識的計算的側面だということになる。<sup>(20)</sup>とつとに指摘されている通り、『水滸伝』は、その中のあまたの姦臣・貪官汚吏批判の言辞にもかかわらず、全体を通して貪官汚吏を糾弾し、姦臣を批判する強烈な意識のもとに構想され編纂されている、或いは貪官汚吏批判の論理が小説全体を貫徹している、とは言いにくいものがある。

その理由としては以下のようなことが挙げられよう。総括的・抽象的な批判の言辞の多さにも関わらず、エピソードを伴った形で具体的に、貪官の苛斂誅求を描くことがあまりないこと（梁中書が「不義の財」生辰綱を集めるに当たって、いかなる苛斂誅求を行ったかは全く書かれていない。青州の慕容知府、江州の蔡九知府など、いずれも一般民衆に対していかなる搾取を行ったか、具体的には書かれていない。花石綱などは恰好の材料のはずなのに、その手先となった楊志の運命は描いても、搾取の矢面に立った人々の被害には全く触れない。容与堂本では朱勳の名さえ出てこない<sup>(21)</sup>）。貪官自身よりも貪官に阿附する周囲の人物、貪官の勢力を利用する人物、上位の官よりも下位の官が第一の悪役となりやすいこと（蔡九知府より黄文炳（三九〇四十）、慕容知府より劉高及びその妻（三三三・三四）、高廉よりもその妻の弟殷天錫（五二二）、高俅・高衙内より陸謙・富安。林冲の受難は、高俅の養子高衙内が林冲の妻張氏に横恋慕するところから起きるが、衙内ははじめ悩みながらも手の出しようがないと考えており、計を弄して張氏を手に入れようと行動を起こすに至るのは太鼓持ち富安にそそのかされてからである。高俅は、衙内が最初の計略が失敗して重い相思病にかかってから事の次第を知らされ、このままでは衙内の命もあぶないということになってはじ

て、躊躇する気持ち振り切つて林冲を陥れる決心をしたのであり、しかも、林冲を陥れることを勧めたのも、陥れる具体的な計略を案出したのも、富安と林冲の旧友の虞侯陸謙である。陸謙を殺す時の林冲のせりふ及び殺し方から見ても、陸謙・富安、特に友人であつた林冲を裏切つた陸謙が第一の悪人としての役割を負つてゐると考えられる。この段では、高俅をもつと悪辣に描こうと思へば描けるはずなのに、そうはしていない。(七〇十)。「貪官汚吏が迫害したため、やむにやまれず落草した」という型から外れる落草が意外に多いこと(魯達の鄭屠殺し(三)、宋江の閻婆惜殺し(二二)、石秀・楊雄の裴如海・潘巧雲殺し(四五・四六)、いずれも官の圧迫とは何の関係もない。史進の落草は獵師李吉の密告(二)とその後の困窮による(六)。商売の元手をすつてしまつたからとか、腕くらべをしてその強さを認められたからとか、つてさえあればせひ入りたいとか、官憲に追われたというわけでもなく、むしろ自ら望んで山賊となつた例も多い。さらに梁山泊がむりやり引きずり込んだ一群の人々がある)、等。

また、姦臣・貪官についての記述は、比較的バラツキのある、不統一なものであり、悪玉としての印象を弱める記述、この人物を憎むべき貪官、悪役であると読者に受け取らせるためには邪魔ではないかと思われる記述がままある。梁中書は、楊志の物語においては、配流されてきた楊志の腕を認め、極力引き立ててやろうとする点(十二・十三)などむしろ善玉であり、少なくとも悪人らしい、憎むべき所行は描かれていない。童貫は、方臘討伐の際は指揮官として宋江を監督する立場にあることになっており、それならばこの立場を利用していろいろと陰險な妨害をした、という話(例えば薛仁貴の物語において彼を妨害した張士貴のように)は作れそうなものなのに、別にそのような話はない。むしろ、童貫は皇帝下賜の品をねこばすることもなく宋江らに渡し、宋江に多くの将領を失つたことを慰める言葉をかけ、宋江はその苦衷を涙を流して訴える、という、少なくとも表面的には、敵同士どころか、宿太尉など



梁山泊に好意的な大官との会話であつても少しもおかしくないやりとりが行われている（九七）。宋江らが功をたててから陰謀をめぐらすより、前線でいろいろやればよきそうなのであるが、そのような記述はなく、方臘討伐中の童貫は、宋江らに好意的であるとはまでは言えないにせよ、少なくとも中立的ではある。高俅すら、九天玄女が宋江に与えた詩に「逢高不是凶」とあり（四二）、楊戩に至つては、「ほとんどこれという記述がない」<sup>(22)</sup>。また、蕭讓は蔡太師府で門館先生（家庭教師）になり、樂和は駙馬の王都尉府で一生安樂に暮らしたとある（二一〇）。蔡太師は当然蔡京、王都尉は高俅を「お喜びになつて」引き取り、その出世の第一歩を提供した王都尉（二一）かと思われる。<sup>(23)</sup> 蔡京ら姦臣が好漢たちの不倶戴天の敵であるならば、彼らはなぜ安閑として、姦臣や姦臣とゆかりの深い人々のもとに引き取られていられるのだろうか。

こうした種々の「夾雑物」の存在は、この作品が当初から一貫して姦臣達を憎むべき悪者とする意図のもとに書かれていたとすれば、余りありえないことである。すなわち、この小説が最初から統一的に、意図的に姦臣を悪役として構想したものは考えにくく、姦臣の「悪」は、後から付随的に悪役性を強調されたものであつて、その改変が不徹底であつたためにこのような不統一が見られるのではないかと考えられる。

このように見てくると、「水滸伝の中でいちばんの憎まれ役の悪者」<sup>(24)</sup> 高俅についてさえ、典型的な姦臣、貪官汚吏の悪役であるとは言にくいことに気づく。史実の上での高俅については、既に言及のある通り、代表的な「宣和の姦臣」の典型とはいえず、人物としては小者であるとされている。<sup>(25)</sup> 『宋史』中には独立した伝がたてられていない。南宋以降、宣和の姦臣を糾弾・批判する際、その代表といえは、まず蔡京であり、童貫、朱勳、王黼、梁師成といつ

た面々である（欽宗即位直後に出された、大学生陳東らの宣和の姦臣を糾弾する上奏文は、六賊を挙げるが、その中に高俅は入っていない<sup>26</sup>）。『大宋宣和遺事』は、三で後述するように、全体を通じて宣和の姦臣に対する批判を強く打ち出しているが、それでも高俅は大きく取り上げられてはいない。そのような、史上の評価では二流の悪役であった高俅が、『水滸伝』においては一番の敵役として立ち現れるのはなぜか。

いろいろなアプローチの仕方が可能であろうが、ここでは次のような点に注意したい。『水滸伝』における高俅は、もともと微賤の出であり、蹴鞠という賤技で出世した男であり、かつ、もところつきであった、樺術で王進の父親にぶったおされたこともあれば（二二）、酔っぱらって「相撲の腕は天下」と妄言するような男であり（八十）、東京を追放された経験があり（二二）、その時世話になった柳世権なる男は王慶のパトロンでもあり（楊定見本・文簡本）、高俅のような男を「お喜びになる」王都尉（二二）は、又、楽和のような者も気に入って引き抜くのである（らしい）（二二）。つまり、（宋代の筆記などに材料を仰いでいるにせよ）『水滸伝』中における高俅の形象は、本質的には好漢達と「似た者どうし」なのである。ただそれに女好きで、武芸の実力は弱く、太鼓持ち的な性格が強調されているために、それが見えにくくなっているだけではないか。つまり、『水滸伝』中の高俅の形象は元来の敵役である強人が矮小化され、「悪」の部分が強調された末の姿に「高俅」という名をかぶせたもののように思われるのである<sup>28</sup>。そして、宣和の姦臣の中で、豪傑達との「似た者同性性」をもたせてもおかしくない人物といえ、その出自がはっきりしておらず、蹴鞠で出世したというエピソードのある高俅が最も適役だった、ということではないかと思われる。その事跡が有名であり、科挙に合格して若い時から官人生活の蔡京、宮中の宦官童貫ではこのような性質をもたせることは不可能であろう。後に触れることになるが（八九〜九〇頁参照）、高俅が林冲（または梁山泊の好漢）に討たれ

て殺されたという話もある程度普及していたようで、そういう結末をつけるとすればなおさら、その最期が有名である宣和のほかの姦臣たちにはその役は務まらないのである。ともあれ、こうして「姦臣」としては唯一悪役らしい悪役、高俣さえ実質は強人でありそれが「姦臣」の皮をかぶったものであるということであれば、「姦臣批判」が『水滸伝』における、当初から含まれていた本質的な存在ではない、ということはかなり確実性を増そう。

高俣の従弟で高唐州知州という設定になっている高廉についても同様のことが言える。そもそも高唐州の一件はその定着度に怪しいものがあるが、そこにおける高廉は妖術の使い手で、公孫勝の手を借りてようやく破ることができたとされている。『水滸伝』には様々な妖術の使い手がでてくるが、百八人の一人混世魔王樊瑞、方臘軍中の包道乙・鄭魔君、挿増部分における田虎軍中の喬道清、王慶軍中の馬靈、と圧倒的に「賊」の中にいるのである（遼の軍中にも賀重宝という妖術使いがいる）。喬道清が羅真人の兄弟弟子（文簡本の設定。楊定見本では羅真人に教えを乞いに行つて追い返された、と「矮小化」されているが）という設定であつた点からもわかるように、公孫勝と彼らは同じ穴の貉であり、似た者同士である。また、妖賊なるものは実在もしたし、『三遂平妖伝』などに見られるように、俗文学の世界では賊軍が妖術を使う、という設定は極めて普遍的であつた。（妖術の術比べの話は、いうまでもなく妖魔小説、『西遊記』や『封神演義』が本場であり、三で後述するように、妖怪イコール山賊と観念されていたという指摘もされている）。妖術の使い手である高廉は本質的には「貪官汚吏」などというものではなく、元来は「賊」の陣営に属していた、好漢たちと本来的には同質のものであり、それが高俣の従弟・高唐州知州という「貪官」の皮をかぶっているに過ぎない。容与堂本では彼の死に際して、

51可憐半世英雄漢、化作南柯夢裡人。（五四）

『水滸』における「対立」の構図

と述べ、楊定見本は「英雄漢」を「五馬諸侯」に改めている。「英雄漢」は、アウトロー、武人を対象として使われる言葉であつて、ここに高廉の出自、本質的な性格を示す言葉が残されている。楊定見本は知州という「官」の、しかも悪人を「英雄漢」と呼ぶのはおかしいということで改変したのだろうが、この改変に、好漢たちの敵役の「同質者（強人）から貪官、姦臣へ」という流れを読みとることができよう。

(二) 生辰綱強奪における「正義の好漢 vs 貪官汚吏」

ここで、まとまった例として、好漢たちの「不義の財を奪い貪官汚吏を誅罰した」例とされる（こともある）、生辰綱強奪の一段について見てみたい。<sup>30)</sup>

雷横に盜賊と間違えられてしよつぴかれかかった劉唐が、晁蓋に助けられた場面では、容与堂本では

52 黒甜一枕古祠中、被捉高懸草舍東。却是劉唐未應死、解圍晁正（蓋）<sup>31)</sup>有奇功。（十四）

と、ここまでのいきさつと、この先、「まだ死ぬべきさだめではな」かった、この劉唐の情報によつて生辰綱強奪を晁蓋が行うことを淡々と述べている。楊定見本では「却是劉唐未應死」の句が、

53 百萬贓私天不佑（楊十四）

と改変されていて、貪官汚吏の蓄財を批判している。

晁蓋は、劉唐が提起した生辰綱強奪について呉用に相談し、呉用は賛成して旧知の阮氏三兄弟を仲間に取り入れる。この場面の詩、容与堂本では、

54 壯志淹留未得伸、今逢學究啓其心。大家齊入梁山泊、邀取生辰寶共金。（十五）

となつており、阮氏兄弟が長らく「壯志」を伸ばせずにはきたが、今回呉用に逢つてその胸の内を開いたことを述べ、将来、彼らが生辰綱を奪い、梁山泊に入ることを予告している。楊定見本では、

55 學究知書豈愛財、阮郎漁樂亦悠哉。只因不義金珠去、致使群雄聚義來。(楊十五)

という、全く違つた詩に差し替えられていて、呉用も阮氏兄弟も、財宝欲しさの気持ちはなく、ただ生辰綱が「不義」の財であるから「聚義」するのだと、「不義の財」を理由に生辰綱強奪の正しさが主張されている。

公孫勝、白勝を加え、呉用の計に従つて生辰綱を見事に強奪した場面では、楊定見本は、容与堂本に見えない詩一首を挿入している。

56 誅求膏血慶生辰、不顧民生與死鄰。始信從來招劫盜、虧心必定有緣因。(楊十六)

ここでは、生辰綱が苛斂誅求により得られたものであること、そのためにこそ強盜を招いたことを述べ、貪官汚吏批判により生辰綱強奪を正当化する論理が非常に明確である。

生辰綱強奪事件は意外なところから足が付き、まず白勝が捕えられ、次いで晁蓋を捕えに觀察の何濤なる者が密かに鄆城県に派遣される。当直の押司宋江は、職務上聞き得たこの秘密を、義兄弟の契りを結んだ晁蓋に急報する。このことをうたった詩、容与堂本では、

57 有仁有義宋公明、交結豪強秉志誠。一旦陰謀皆外泄、六人星火夜逃生。(十八)

と、何の疑問もなく(貪官汚吏批判を経由することなく)宋江の内通行為は「仁義」「志誠」として称えられるがごときであり、あとは彼の情報のおかげで、晁蓋らが逃げることでできたところとあっさり予告するのみである。私的交情が王法に優先することを当然のように認め、称えるこの態度は、同じ場面で余象斗評が宋江が晁蓋に消息を漏らすのは

「一家ぐるみの友人」であり「天が晁蓋らをおしまいにさせなかつた」（巻四）からで、ちつとも怪しからぬことではないとするのと、通じるものがある。これに対し、楊定見本では、

58 義重輕他不義財、奉天法網有時開。剗民官府過於賊、應爲知交放賊來。〔楊十八〕

と、宋江の行為が正しいとされるのは、生辰綱が「不義の財」だからであり、官府が民を搾取すること、賊よりひどいからなのである。ここでも、好漢を、貪官汚吏と対立させ、貪官汚吏批判を経由した上で、好漢の違法行為がはじめて「正しい」とされる論理が見える。

さて、晁蓋らは阮氏兄弟のいる石碣村へ、さらに状況によつては度量が狭い寨主王倫を金で買収して梁山泊入りしようかと相談する。ここで、楊定見本は

59 無道之時多有盜、英雄進退兩俱難。只因秀士居山寨、買盜猶然似買官。〔楊十八〕

の一詩を挿入し、官の無道のために晁蓋らが梁山泊に入らざるを得なくなつたとし、王倫を買収することを、官を買収するのと同じだと述べ、官に対する批判をも同時に行っている。

晁蓋らが邸を脱出しようとする場面、容与堂本では、

60 大師符督下州來、晁蓋逡巡受禍胎。不是宋江潛往報、七人難免這場災。〔十八〕

と、単純にここまでの粗筋をリフレインし、宋江が急報しなければ晁蓋らは危うかつたと価値判断抜きで述べているだけだが、楊定見本では、

61 須信錢財是毒蛇、錢財聚處卽亡家。人稱義士猶難保、天鑿貪官漫自誇。〔楊十八〕

と、晁蓋らが邸を逃げ出す場面の詩であるにも関わらず、財産が身を滅ぼすものであることを言うと同時に、貪官批

判にまで及んでいる。

知県の命で何濤らと共に晁蓋を捕えに來た朱仝・雷横、特に朱仝は晁蓋と親密であり、故意に晁蓋を逃がし、梁山泊に逃げると良いとまで忠告する。この場面の詩、容与堂本では、

62 捕盜如何與盜通、只因仁義動其衷。都頭已自開生路、觀察焉能建大功。(十八)

と、ここでも、57同様、王法よりも私的交情を優先して賊を逃がすことは、当然のごとくあつさりと「仁義」であると称えられ、朱仝のおかげで（晁蓋が逃げのびて）何濤は功をたてそこなつた、と別にそれを隠したり正当化したりする必要を感じているようすもなく、述べられている。これも、同じ場面で、余象斗評が

63 朱仝雷横皆是晁蓋心腹（腹）之人、豈肯執公捕捉、以傷結交之情哉。(卷四)

64 二人放走趙（晁）蓋、乃平昔交厚、而故拿隣人抵其本官。(卷四)

と述べ、またこの後、閻婆惜を殺して実家に潜伏していた宋江を朱仝（・雷横）が逃がしたことについて、

65 二人見宋江、交他逃之、此非結交之深而何。<sup>39</sup>(卷五)

と評し、つきあいが深ければ内通して当然とばかり、いずれも悪いこととは思っているようすがないのと共通するものがある。これに対し、楊定見本では、

66 捕盜如何與盜通、官賊應與盜賊同。莫疑官府能爲盜、自有皇天不肯容。(楊十八)

と、その正当化の理由を、貪官汚吏の行う「官賊」、官府が盜を為すことに帰している。

同様の方向性は楊定見本評にも見える。阮氏兄弟が梁山泊の盜賊以上に捕盜（官兵）がひどいことを訴えた場面

〔十五〕では、

67 説透千古情弊、使人見官府痛心、見盜賊快意、如此世界、便是險事。

また、同じ場面で、お上のやり方はめちやくちやだとの言葉を受けて、

68 説出劫盜根本、眞有關係。

と評する。生辰綱は不義の財だから盗んでもよろしいということを公孫勝も言い出す〔十六〕と、

69 頻提此四字（「不義之財」）、方與劫盜異、方與忠義合。

と評し、生辰綱が盗まれた第十六回の総評では、

70 生辰輟（輒？）<sup>34</sup>用十萬貫金珠、此必從掊剋得來、卒爲綠林中好漢取之、可爲貪得者之鑒。

とし、一貫して貪官汚吏を批判し、彼らの横行が盜賊を招いたこと、従つて不義の財を奪うことは普通の強盜とは異なり、正しいことを強調している。また、宋江の家になぜ隠れ場としての地下室があつたか、という説明として「宋のころは官となるは易く、吏となるは難かつたのである。なぜ官となるは易いかというと、その当時朝廷は姦臣が要路にあり、讒佞が権力を専らにしていて、親しいものでなければ用いず、財を贈らねば採用しないというありさまだつたからである」〔二二〕と述べたところで、

71 此是一部書の大題目、特爲掲出、莫作閑話看過。

と、この姦臣・貪官批判がこの本の「大題目」であるとまで主張している。

許自昌の伝奇「水滸記」<sup>35</sup>中の生辰綱強奪の段では、「貪官汚吏に対抗する正義の好漢」という構図はより鮮明にさ



れている。生辰綱の強奪は、

72 那生辰綱載珍和寶、逐件件是民間剝下脂膏。只見那搜刮價把民財耗、又見那輸運價把民力擾。〔五〕【北刮地風】  
という貪官汚吏の横暴に対する懲罰として劉唐から提起され、公孫勝も（「這是官物、我們平民怎麼好去劫掠他的？」  
という晁蓋の故意の言葉に）

73 你道是官物麼？你看如今百姓爲何窮了？你道平民不可行劫麼？你看如今的好漢、那一箇不思倡亂哩。〔十〕

と説く。一方、生辰綱の強奪のメンバーから阮氏三兄弟が抜け落ちており、従って呉用が阮氏兄弟を口説き落とす、  
「全篇の中でも出色の『不逞』感のただよっているところ」<sup>36</sup>はきれいに抜け落ちている。阮氏兄弟が、「秤いっぱいの  
金銀をわけあい、肉も酒も食べ放題飲み放題」の盗賊の生活に羨ましさを表明するような場面も、当然消えている。

こうして生辰綱の強奪は、貪官汚吏の横暴に対する怒りが動機とされ、さらに、自分達が安楽な生活を楽しむという  
『水滸伝』における晁蓋らの態度を改変して、生辰綱を奪った直後、公孫勝の提案で、ほかに巻き添えとなつて迷惑  
を蒙る人々が出るのを避けるため、わざと白勝を自首させて、官府の兵がやってくるのを待ち、それを公孫勝の法術  
で打ち破つて梁山泊に逃れることに決めておく〔十四〕、という態度を取らせている（これでは宋江がわざわざ注進  
に及んだのは馬鹿みたいなものであるが）。ここでは、（こうしたストーリー上に不自然さを生ずるリスクを冒してで  
も）好漢たちの「正義」は完璧なものとされ、「貪官汚吏に対する好漢たちの誅罰としての生辰綱強奪」という性格  
づけも確固たるものとされる。

しかし、そもそも、小説『水滸伝』の生辰綱強奪の一段を、本文に即して「文字通り」読む限り、好漢達の行為を

「正義の行い」と名づけるのは、相当に苦しい。劉唐、公孫勝が晁蓋に生辰綱強奪のを持ち出すときのせりふ、

74 特地送一套富貴來與保正哥哥。(十四)

75 今有十萬貫金珠寶貝、專送與保正作進見之禮、未知義士肯納否?……此一套富貴、不可錯過。古人有云：當取不取、過後莫悔。保正心下如何?(十五)

は「単に富を掠めて自分のものにしてしよう」ということであるし、呉用が阮氏兄弟に説いて、

76 取此一套不義之財、大家圖個一世快活。(十五)

というのも、不義の財を奪って、結局は自分たちが富貴を楽しもう、との意図であることを表明している。実際、彼らは奪った生辰綱を山分けし(発覚時、旅の身の公孫勝・劉唐はまだ晁蓋の邸に滞在中であったが、白勝・阮氏兄弟は分け前をもらって家に帰っている(十八)、別にそれを貧乏人に分け与えようとか、苛斂誅求された(ということになっている)北京大名府の民に返してやろうとかいう発想は見えない。ましてやその苛斂誅求を行った(とされる)貪官梁中書を誅しに大名府に押し寄せるわけではない。(今ここに、「苛斂誅求を行った(とされる)」と書いた。確かに、好漢たちの「聚義」の時の誓いの言葉には、

77 梁中書在北京害民、詐得錢物、却把去東京與蔡太師慶生辰。此一等正是不義之財。我等六人中、但有私意者、天地誅滅、神明鑒察(十五)。

とある。あるけれども、梁中書がいかに酷薄に民を苛斂誅求したか、彼の「不義の財」の「不義」の実態を、具体的に描写している箇所は別にないのである)。劉唐が晁蓋に、

78 小弟想此一套是不義之財、取而何礙。便可商議箇道理、去半路上取了。天理知之也不爲罪。(十四)

と言ひ、晁蓋が呉用に

79 此等不義之財、取而何礙（十四）。

と言ひ、公孫勝が晁蓋に

80 這北京生辰綱、是不義之財、取之何礙（十六）。

と言ふ、ほとんど同文が繰り返されるこの理屈は、「不義の財であるから奪つても構わない」であつて、「不義の財を奪うことは正しい」でも、「正義のために不義の財を奪おう」でもない。これは微妙な差異ではあるが、「正義の好漢 vs 悪の貪官汚吏」の図式は、この微妙な差異を捨象してこそ取り出されることに注意すべきだろう。第一、我々は、この一段を通して読んだ時、「貪官汚吏を誅罰する正義の好漢」に喝采するのだろうか？ 彼らの「正しさ」に共感するのだろうか？ 生辰綱強奪の見事なからくり、楊志があれだけ知恵をしぼり万全の態勢を整えようとしてうまくいかず、ほとんど必然のように呉用の計にはまってしまう経緯、好漢たちの細心にして大胆な強奪ぶり、これらを娯しむのに、彼らが「正義」である必要があるのだろうか？

容与堂本における、価値中立的な、単にあらすじをリフレインしたり、先の展開を予告するに過ぎない記述、私的交情を王法に優先させて賊を逃す行為を、辯解したり正当化したりする要もなく、そのままあっさり「仁義」とほめてしまう（余象斗評の態度とも通ずる）記述は、楊定見本においては、しばしば消し去られ、貪官汚吏を批判し、それによつて好漢の正しさを主張する記述に書き変えられ、また、そのような記述が書き加えられたりしている。楊定見本評において、こうした記述はより増幅され、貪官批判はこの書の根本、大題目とされる。或いはまた、許自昌

の伝奇『水滸記』においては、より露骨に、好漢の正義らしからぬ部分、「財を掠めて自分のものとする」意図を示す記述が切り捨てられ、貪官汚吏への怒りと批判が生辰綱の強奪の動機とされ、好漢は巻き添えを食う人々が出ぬよう配慮して、故意に仲間を自首させておいて官軍を撃退するくらい、あくまでも正義であるとされる。こうして「悪の貪官汚吏に反対し、貪官汚吏を誅罰する正義の好漢」という図式が前面に押し出され、同時に、この一段のストーリーの基本部分に底流する、「正義」との無縁さ、「正義」抜きで強奪の話をして楽しむ態度、王法が私的領域に必ずしも貫徹しないことを認める価値観、等は退けられ、見えにくくされている。

(三) 「正義の好漢 vs 悪の貪官汚吏」、「忠君の好漢 vs 君側の姦臣」

貪官汚吏を批判し、またそれによつて好漢の違法行為を正当化する方向性は、楊定見本の全体にわたつて、その改変（削除、増加を含む）ぶりから見い出すことができる。

高俵及びその養子衙内を批判した37、36の詩もその例と見ることができ、魯智深が林冲を野猪林で助け、滄州近くの安全なところまで送つて行つたという場面に挿入された詩、

81 最恨姦謀欺白日、獨持義氣薄黃金。迢遙不畏千程路、辛苦惟存一片心。（楊九）

が、魯智深の義氣の賞賛を主眼としつつも「姦謀」に対する好漢の敵対感情をしっかりと詠み込んであるのもその例と言えよう。

楊志が梁山泊の王倫に引き留められたのを振り切り、復職しようとする開封に戻り、運動を行ったものの、高俵にあまり却下され、路用も使い果たしたという場面で、楊定見本が挿入した詩は、

82 花石綱原沒紀綱、奸邪到底困忠良。早知廊廟當權重、不若山林聚義長。(楊十二)

と、花石綱を批判し、「奸邪」が「忠良」をくるしめたことを指摘し、高俅対楊志(そして姦臣対好漢)の両者の対立を明瞭に提示している。<sup>(38)</sup>

また、宋江が郷里に戻ったのが通報され、都頭の趙能・趙得兄弟が宋江を捕えに押し寄せるが、宋江が二人に賄賂を贈ると急に機嫌がよくなる、という場面では、

83 都頭見錢便好、無錢惡眼相看。因此錢名好看、有錢無法無官。(楊三六)

と、賄賂をむさぼり「法無く官無き」さまを批判している。

呼延灼の副将として梁山泊を攻め、捕虜になった彭玘が、梁山泊側の「義氣」に感動したところ、宋江が自分たちは恩赦を受けたならば「忘生報國、萬死不辭」とその志を述べた、という場面では

84 忠爲君王恨賊臣、義連兄弟且藏身。不因忠義心如一、安得團圓百八人。(楊五五)

と、梁山泊の忠義、忠君を強調し、「賊臣」を彼らの対立者としている。

さらに、李逵が、宋江が婦女をさらったとの話を真に受けて怒り(実は宋江の名を騙った王江なる山賊のしわざ)、忠義堂に戻ると「替天行道」の旗を斬り、宋江に切りかかったという、ほとんど姦臣とは何の関係もないように思える場面でも、

85 梁山泊裏無奸佞、忠義堂前有諍臣。留得李逵雙斧在、世間直氣尙能伸。(楊七三)

と、李逵の行為を朝廷における諍臣に比し、奸佞が跋扈し、あるべき姿ではない朝廷への批判をも行っている。

また、楊定見本評も同様の方向性をもち、本文の改変と相俟って姦臣・貪官汚吏批判、貪官汚吏vs好漢の図式を強調する。

例えば、花石綱の運搬に失敗した楊志が復職を願い出たのに高俅が許可しなかったという場面〔十二〕では、82の詩の挿入と共に、

86如此判斷……使人憤恨、不惟驅受害的英雄入賊、即聞風者亦俱生異志矣。

との評を附している。また、張順が船頭に身ぐるみ剝がれ、殺されかかったが、得意の水泳で何とか対岸まで泳ぎ着き、ある老人に助けられた際、老人が、張順がその一味だとは知らずに宋江一党をほめ、それと対比してほかの賊や濫官汚吏を罵った場面〔六五〕では、

87罵賊便罵到官吏、以官吏之惡、甚於草賊也。

と評し、蔡京の門人華州の賀太守の悪行が述べられる〔五八〕と

88高俅蔡京是養奸致亂之種。

とすかさず指摘している。梁山泊の招安の提案が最初に却下された第六十七回の回末総評でも、秦檜が張（俊）・韓（世忠）・劉（光世）・岳（飛）の手柄をだいなしにしてしまったことをひきつつ、

89宋功（公）明顯望招安、乃蔡京力主剿滅矣。趙大夫議無、便獲罪譴、此宋事所以壞于權奸也。

と述べる。好漢の落草は貪官の迫害が原因であり、賊が起こり乱が起こり、宋の南渡の原因も姦臣どもにあるとされ、官の悪は賊の悪と対比されて、それより甚だしいと述べられている。

さらに、伝奇の諸作品においては、こうした傾向はより明瞭に看取される。

その中で特に顕著なのが李開先『宝剑記』<sup>(39)</sup>である。『宝剑記』においては、林冲の対立者は完全に姦臣としての高俅（及び童貫）に移っている。林冲は方臘が「入寇」した際軍に投じ、辺境に戦って、征西統制の職を授けられていたが、童貫が王を称しようとしたことを弾劾する上奏をしてその職を奪われ、張叔夜の推薦で禁軍教師となったとされている。林冲は高俅・朱勳らが天子を惑わせて花石綱を強行し、天子は李師師を寵愛して政治を顧みず、天下荒唐胡馬南渡のありさまであることに心を痛め、童貫・高俅を弾劾した上奏文を奉り、逆に童貫・高俅に憎まれて陥れる、ということになっている。高衙内（高朋）が林冲の妻（張貞娘）に横恋慕するのはその後であり、『水滸伝』とは違い）これは林冲の禍の主因ではない。第一の原因はあくまで林冲という忠臣と高俅・童貫ら姦臣との対立にあるのである。

また、林冲は登場の際（二）、家宝の宝剑を賞でつつ張貞娘に（四）、上奏文を提出する際（六）、「土蕃を征した際、林冲と義兄弟になった」<sup>(41)</sup>魯智深と語り合った際（八）、随時、姦臣が権を専らにしていることを批判し、自らの国家に尽くす忠心を明らかにしている。さらに楊業の末裔とされる開封府尹楊清の調べに対し、また流罪先の滄州の太守に對して、自らが辺境において功をたてたこと、童貫・高俅を弾劾したため彼らの恨みを買ったことなどを訴えている。また、林冲が梁山泊入りすると、宋江は林冲に賢臣（二程・三陳・方軫）の消息を尋ね、林冲がかれらは或いは陥れられ、或いはそれを恐れて引退してしまい、蔡京・童貫・高俅・朱勳が国政を壟断しているありさまであることを答えると、宋江が憤激する、という場面も設けられ、林冲は梁山泊に入る結盟の前に宮城を遙拝することになっている（四七）。そして、侯蒙らの上奏により、梁山泊を招安し、高俅父子を死罪とする事が決まり（四九）、林冲は官

のお墨付きのもとに堂々と復讐を遂げる〔五十〕こととなる。このように、『宝剣記』ではしつこいくらい姦臣批判・当時の国政の批判が繰り返され、それと対照させて、林冲（及び宋江ら）の赤心報国、忠君が強調される仕組みになっている。

『宝剣記』の例はやや極端ではあるが、好漢の対立者を姦臣とし、忠臣である好漢対姦臣の抗争としてその対立をとらえる方向性の最も推し進められたものと見る事ができる。

『宝剣記』の改作であることが明記される陳与郊『靈宝刀』<sup>(42)</sup>では、このトーンはだいぶ落ち、『水滸伝』同様、高衙内（高朋）の横恋慕が林冲の禍の源ということになっており、憎まれ役も高俅より林冲の義兄弟でありながら林冲を裏切った陸謙に重点が移っているが、魯智深が林冲の家で陸謙と共に酒を飲んだ際、陸謙の意見に反対して高俅を批判し（二二）、梁山泊の宋江が蔡京・朱勳・童貫・高俅らが朝廷の政治を乱していることを批判する台詞を述べ（三十一）、詔書を捏造して招安をぶちこわし梁山泊を討ちに來た高俅父子を逆に梁山泊軍が捕え、林冲が高俅の奸悪を責め（三二二）、宋江も高俅の「迷君誤國剝民財」の罪を挙げ、処刑する（三三三）など、姦臣批判、それによって好漢を正当化する論理ははっきり認められる。また、許自昌『水滸記』でも、宋江・晁蓋が酒を酌み交わしつつ、姦臣が権を専らにする事を嘆き、讒佞を誅し、王図をたすけようとの志を語り合う場面（二二）があり、また小説『水滸伝』では不問に付されてしまう「貪官」蔡九知府もしつかり殺されている。李素甫『元宵鬧』<sup>(43)</sup>でも、盧俊義が讒佞が民を虐げ、ために四方に賊が起こっていることを憂えている場面（二二）が描かれている。『義俠記』は、それほど強烈には姦臣批判を打ち出していない作品であるが、楊戩が梁山泊を攻めて敗れ、捕えられたものの釈放されたのをよいことにこれを朝廷に隠し、再び討伐軍を興そうとするのを、宿太尉が諫争し、宋江らの忠義の志を伝え、楊戩の敗北を暴



露してその奸悪を責め、招安にこぎつけるという場面(二三五)「廷議」が設けられている。

この「正義の好漢vs悪の貪官汚吏」の図式はまた、「忠君愛国の好漢vs君側の姦臣」の図式と親和性が高い。『宝剣記』が、上述のように、林冲の忠君愛国の心、忠臣としての林冲の形象を繰り返し強調し、姦臣たちと対立させているのはその顕著な例である。その他の伝奇作品も、『宝剣記』ほど極端ではないものの、上述のように姦臣批判を行うと同時に、好漢には謀叛の心はなく、忠君愛国、尽忠報国の志があることを述べている。例えば『義俠記』では、梁山泊の豪傑達が

90 願取黄榜招安、爲國除患。(二二)【錦堂月】

とその志をうたっている。沈自晉『翠屏山』<sup>(46)</sup>でも戴宗を送る宴で、宋江をはじめとする好漢達が、忠肝義胆を懷き、替天行道し、皆そろって招安を待ち、国家に尽くそうとの心を持っていることをうたう場面(二三)がある。『元宵鬧』では、宋江らが一同報国安民を願っているとされる(二三)。

また、楊定見本82、84、楊評43、69などが、姦臣と好漢を対比させたり、好漢の忠義・忠君(ただし43、69の「忠義」は忠君とイコールではないかもしれない)<sup>(46)</sup>を強調しているのもその例と見られるし、また、好漢・梁山泊の忠義・忠君を強調する記述の増加もある。

楊定見本第四十二回に、

91 有古風一篇、單道宋江忠義得天之助。(楊四二)

とわざわざ断つて容与堂本第二十一回の入回詩を改変したものを挿入している。しかし、容与堂本の詩は、宋江が天

の星に応じ九天女から天書を受ける人物であること、「仁義禮智信が皆備わり」、豪傑と良くつきあい、困しむをすくい危うきを助ける人物であるとはうたっているが、忠義だということは別に言っていない。改変されたものも特に宋江の忠義（とりわけ「朝廷に忠誠」。楊定見本・評においては「忠義」は基本的には「朝廷に忠誠」である）をうたっているという感じはないのである。にもかかわらず、楊定見本は、この詩を「宋江の忠義が天の助けを受けたことをうたったもの」として性格づけ、読者にもそのように受け取るよう要求、というか細工し、宋江が忠義であることを強調しようとしている。

また、第八十回では、梁山泊軍が高俅を捕えるのだが、宋江が招安を取り次いでもらおうと歓待した上釈放してしまふ。容与堂本では、宋江は二度、高俅が捕えられた日とその翌日、招安を頼んでいる。（いずれも高俅はほいほいと承知し、その後宴会になる）。三日めに、高俅が帰るに及んで何を思ったか「だれか気のきく人を都に連れて帰って天子に会わせたい」といい出し、蕭讓・楽和が同行することになる。楊定見本では、三日目に高俅に金銀を贈った上でもう一度宋江が招安のことを頼み、それに応える形で「誰か気のきく人を……」となる。ほんの数行の増加であるが、梁山泊側（というか宋江）の招安への熱意、大量の金銀をもらった上で裏切った高俅の悪が強調される仕組みになっている。さらにこの数行後で、容与堂本は

92（宋江等）拜辭了高太尉、自回山寨。正是眼觀旌節至、耳聽好消息。（八十）  
と、良い消息を待つ、という意味の決まり文句でしめているのに対し、楊定見本はここを

93 專等招安消息。（楊八十）

とする。確かに「良い消息を待つ」とは具体的には招安のニュースを待つ、ということに違いないが、それを露骨に

はつきりいうことで、宋江らの招安に対する熱意、即ち忠心が強調されるという側面はあるだろう。

一方、遼が宋江らの強さに驚き、宋江らを招安しようと図ったところで、宋江が呉用に意見を聞くと、呉用は躊躇しつづつ宋の朝廷に対する疑念を述べた上で、容与堂本では、

94 へ従其大遼、豈不勝如梁山水寨。只是負了兄長忠義之心。(八五)

と言うという記述がある。また、遼征討から帰ったのち、朝廷の扱いがあまりにも冷たいため、宋江が

95 破遼受了許多勞苦、今日連累衆弟兄無功。我自職小官微、因此愁悶。(九十)

と述べた場面があり、94は遼ですら梁山泊よりましだとなると、招安を受けた目的は地位や富貴を求めてのものなのか、との疑いを起こさせるものであり、95も、出世が目的で招安を受けたのか、と思わせる記述であつて(事実容与堂本評は「麥だぞ、忠義はどこにいつてしまったんだ?」と批判している)、いずれも、呉用・宋江の忠義(忠君)の純粹さをそこなう記述である。楊定見本は、94のへゝの部分を、

96 棄宋從遼、豈不爲勝。(楊八五)

とし(これだと同じ遼に降るのでも、梁山泊の実利上の優位は必ずしも傷つけられず、損を承知で宋の招安を受けたという説明・招安を受けた動機自体については、94のように決定的に疑いをもたらない)、95の「我自職小官微、因此愁悶。」を削つて、宋江らの忠義(忠君)の純粹さを損なわないように改変している。

また、楊定見本評は、物語の冒頭、洪太尉が魔を逃した場面で、「二つには宋朝に必ずや忠良(逃した魔、すなわち宋江ら百八人を指す)があらわれるさだめ」「二」と述べた部分で、

97 忠良二字是此一部書根本。

と述べ、九天玄女が宋江を

98 汝可替天行道爲主、全忠仗義爲臣、輔國安民、去邪歸正。<sup>(48)</sup>〔四二〕

と諭した場面で、

99 數語是一部作傳根本。

と評し、宋江らが宋朝にとつての忠良であり、彼らの忠義が『水滸伝』の根本であることを主張している。

こうした、楊定見本の改変部分、楊定見本評や伝奇の諸作品の方向性は、余象斗評と対照させるとより鮮明になる。余象斗評は、宋江が反詩を書いた一件について、

100 宋江詞語志氣非凡、意味爽人。(卷八)

と評し、史進・穆弘が元宵節の東京で不穩な詩をうたった場面でも、

101 史進穆弘歌詩之句出其本意、實丈夫之志。(卷十五)

と、評し、白勝が官府に捕まって拷問されても共犯者の名を吐かなかつたことを

102 此處見白勝眞丈夫也。(卷四)

と評する(この部分を容与堂本評は「賊骨」(二八)と罵る)など、謀叛や官府への正面切つての反抗をあつけらかんとほめてしまう。これは二(二)で触れた、私的交情を優先させて賊を逃がすことを当然のこととして称える態度とも通底し、余象斗評においては、常に王法・公権力が絶対的に優先すべきだとはされていないと考えることができる。公的な法が貫徹し得ない私的領域が存在し得るし、(朝廷・皇帝への忠誠もほめたえられる一方で)謀叛の

心を起すくらいのことには「大丈夫」としては当然のこととされる。ちょうどこれと表裏をなすようにして、余象斗本は、宋江らが招安を受けた動機は実利（高官重爵）にあったとする、文繁本には無いエピソードをもつ（巻二十二）。このエピソードが余象斗本（またはそれに先行する文簡本）によって独自に入れられたものなのか、もつと古い（文繁本も含む）『水滸伝』にもともとあつて、現行の文繁本はそれを削除したもののかはわからないが、現行の文繁本にはなく（もしもとはあつたとしても現行本の段階では許容されず）、余象斗本及びその系統をひく文簡本には存在する（許容される・或いは支持されている）ことは事実である。<sup>49</sup> 豪傑たちの叛心を「丈夫の志」としてそのまま肯定してしまう感覚は、また、（楊定見本ではかなり完整な形で提示される）忠君という観念を満足させるためだけの忠君、自分達が報われないこと、実利が得られないことをある程度覚悟の上での「尽忠報国」というものを、不自然な、嘘っぽいものとして感じるであろうし、宋江らが悲劇的な結末を迎えたことについて、「彼らは成功を得られなくともよく、自らの忠心を満足させるために招安を受けたのだ」という説明より、「彼らは富貴を求めて地位に恋恋としていたがために禍に遭つたのだ」という説明に説得力を感じるであろう。『水滸伝』が、表面上は好漢たちの「忠君のための忠君」を語りながら、物語全体としてはどこか白々しさ、建て前的なものを感じさせ、また容与堂本では94、95のように、「出世・富貴を得るための招安・忠君」を思わせる記述をもつのは、こうした感覚がいかにも根強いかを示している。楊定見本がこれを改変して、実利を目的としない、自らの忠心を満足させるための忠君という、いささか不自然なものを確立し、好漢たちの忠君の「純粹さ」を保全しようとする時、実利のための「不純な」忠君と共に、「大丈夫」の叛心に爽快さを感じる感覚もまた、最初から存在しないかのごとく振る舞われる。そして、『宝剣記』に最も顕著に表れているように、「不純な」要素をすっかり切り捨て、完璧な忠臣として形象された

好漢こそが、最も鋭く姦臣批判を体现することができるのである。「好漢 vs 貪官汚吏」の対立は、好漢の「忠臣度」がより高く、純粹になるほど尖鋭なものとなり、「正義にして忠君愛国の好漢 vs 邪悪な君側の姦臣」の構図として、ここに完整な姿を見せる。

### 三 小 結

筆者は以前、水滸の好漢を主人公とした元・明雜劇を分析し、次のように論じた。<sup>(50)</sup> 主人公たる強人の基本的な行動論理は「強さへの尊重」、次いで「仲間うちの助け合い」であり、道徳的な善悪を判断の基準とすることは時代的に比較的後の、あるいは作者・享受層が比較的高級だと思われる作品において見られる。そして『黒旋風負荆』、『黄花峪』劇などから考えて、これは、元來善悪とは関係なしの、強人同士が強さを競い、戦う話（武術試合を中心とした話などがその典型と考えられる）<sup>(51)</sup> であつたものに、「強き」が勝ち合うための道具立てとして、行きずりの被害者からみ、「梁山泊の好漢Ⅱ善玉、相手Ⅱ悪」という色分けがなされ、付随的に好漢の義拳の動機としての「道徳的な善悪」が現れたものではないかと推測される。例えば、『黒旋風負荆』劇では、李逵が偽宋江をとらえに行くのは被害者が救出された後であつて、「被害者のため」という感じが薄く、名を騙られた梁山泊自身のための意趣返しという感じがする。つまり、強人同士の争いというのが本質であつて、好漢の道徳心、義侠心は付随的なものに過ぎない（これが、同劇と情節をほぼ同じくする小説『水滸伝』第七十三回では、偽宋江を殺しに行つて、被害者も救つてくると好漢の義侠心がやや強調された仕立てになつており、また、拐われた娘の口から悪玉の悪行が具体的に語られ

ている)。又、『黄花峪』劇及びそれに関連した資料について検討した結果、元来強人蔡松栢を敵役として「強人同士  
の争い」として描かれていたものが、蔡松栢から強人的要素を一部削り、悪の要素を強調して、「蔡衙内」の悪事と  
して仕立てられたものであるらしい、との推測を得た。<sup>59</sup> これもやはり強人同士の争いが原型にあるものと解釈できる。  
そして、道徳的善悪が好漢の行動の動機として前面にでてくるほど、「原型」では好漢と同質のものとして描かれて  
いた）敵役を、道徳的に悪い、怪しからぬ奴として仕立てる、という傾向が見られる。

一（二）で見たように、文簡本『水滸伝』の征田虎・王慶部分においては、田虎・王慶及びその配下の将は、梁山  
泊好漢と質的に異なった「悪玉」「悪人」ではなく、好漢たちと同質の人物として描かれ、田虎・王慶に対する忠節  
も称揚され得（一）（三）で触れたように、容与堂本においても、方臘の宮城の炎上を善悪の評価抜きでニュートラル  
に描写するなど、賊を絶対的な悪とは必ずしもしない記述が見える）、宋江側に加われば兄弟分として遇され、両者  
の戦いは同質者同士の戦いという性格を帯びている。

また、一（二）で見たように、一見「善玉vs悪玉」の対立であるように見える武松と蔣門神の関係も、（特に容与  
堂本においては）同質者同士の争いとしての性格が濃く残されている。小説『水滸伝』中には、蔣門神のほかにも、  
燕青に泰山の奉納相撲で敗れた任原（七四）、魯智深・史進に退治された崔道成・丘道乙（六）、楊志からんで殺さ  
れたごろつき没毛大虫牛二（十二）、武松に退治された飛天蜈蚣王道人（三一）、楊雄からんで石秀に追い散らされ  
た踢殺羊張保（四四）、宋江の名を騙って結局李逵に退治された牛頭山の賊王江（七三）など、堅気の人々からみれ  
ば豪傑たちの同類項である、強人や無頼の敵対者も少なからず存在する。また、史進と陳達ら少華山の山賊（二）、  
魯智深と周通（五）、史進と魯智深（六）、楊志と林冲（十二）、楊志と曹正（十七）、楊志と魯智深（十七）のように、

後には一緒になる好漢同士が相戦うことも多い（というか、それが新しい好漢を登場させる主要な方法の一つである）。梁山泊集団になつてからも、芒碭山、祝家莊、曾頭市との戦いは同質の者同士の縄張り争いと見ることが可能である（少なくとも実際に戦う者同士が同類項であることは確かである）。好漢の敵対者側が女を拐うなどの悪事をしているといった色分けは確かにしばしばなされているが（こうした色分けは雜劇において「強人同士の争い」を「善玉・悪玉の対立」に色分けする際にも見られたものである）、任原や祝家莊、曾頭市のメンバーにそのような「悪」が見られない一方、後に梁山泊入りする周通には女を強奪しようとするという「悪」が付与されているなど、その区別は絶対的なものではない（ちなみに、魯智深にげんこつ三発で殴り殺される豚殺し鄭屠のあだ名「鎮関西」は、『黒旋風負荆』劇では魯智深の名に冠せられている<sup>53</sup>）。金文京氏は、『三国演義』『水滸伝』『西遊記』及び説唱文芸を反映して成立したと目される『花関索伝』等の分析から、これらの作品における主役と敵役が、いずれも「本質的に似た者同士」「本来同一の存在」であることを指摘し、また、『水滸伝』における山賊と官軍、『西遊記』における孫悟空らと妖怪は、境界が曖昧でしばしば入れ替わり得る（さらには山賊イコール妖怪と観念されていた）ことを指摘している<sup>54</sup>。そして、二（一）で見たように、知府でありながら妖術使いとされる高廉、さらには姦臣の代表として『水滸伝』第一の敵役とされる高俅ですら、濃厚に強人、無頼漢としての性格をそなえている。これらの諸点を勘案すると、好漢たちが戦う相手は本来は同質者（自らの膂力に頼つて渡世する人々）であつたと考えられよう。

敵役が好漢の同質者として描かれる、と上に述べたが、好漢が敵役の同質者として描かれている、と表現した方が或いは正確かもしれない。『水滸伝』、とりわけ容与堂本には、一（二）、（三）で指摘したように、好漢の兇悪・兇暴な側面、正義とは言いかねる側面を、隠したり正当化したりすることなく淡々と述べた記述が少なくない。また、そ



れは余象斗評において、好漢の乱暴、兇悪な行為を「大丈夫」「天の星」として当然のこととする態度と通じている。二(二)で見たように、『水滸伝』の、特に容与堂本における、生辰綱強奪の一段は、好漢たちの細心にして大胆な強奪ぶり、強奪の計略の見事さなど、「正義」とは無縁のところにある面白さを、そのまま話として楽しめるように書かれている(容与堂本の挿入詩がしばしば、価値中立的な、これまでの筋のまとめとその先の予告を主としているのも、話の展開の面白さに重点をかけて語る姿勢の表れであろう)。これに應じるように、強奪犯の屍蓋らに内通し、逃がした宋江・朱全らの行為は、容与堂本においては貪官汚吏批判による正当化を経ること無く、そのままあつさり「仁義」として称えられる。これもまた、余象斗評がつきあいが深ければ内通は当然という口吻でそれを称えるのと共通している。

好漢の兇暴をそのまま「大丈夫」として当然とする感覚、「正義」では必ずしもない強盜の見事な強奪ぶりに喝采する感覚、私的交情を王法に優先させ賊を逃すことを「仁義」として当然のごとくほめ称える感覚。これらは、余象斗評が、好漢が謀叛の心を表す場面や、官の取調べに応じず仲間を守る姿勢を「大丈夫」「爽快」とあつげらかんとほめてしまつたり(二(三)(三))、容与堂本が、梁山泊軍が官軍を打ち破つたことをたたえ、官軍の將を嘲笑する詩を載せて平気である(一(三)(三))のと基盤を同じくすると考えられる。ここでは、好漢たちは「正義」であることを要請されない。ましてや「忠義(朝廷に忠誠)」であることは要請されない。むしろ、彼らの招安・忠君に関して、忠君の志を満足させるための「純粹な」忠君という「不自然」な説明より、実利・出世を目的とした忠君という説明が、納得できるものとして支持される(二(三)(三))。そして、公権力に対する反感を表明すること、正面切つて、或いはひそかに、公権力の貫徹を拒むこと、これらは「正義」とは関係なく、いな、むしろ、「正義」ではない兇暴な彼らだ

からこそできることとして、共感され、喝采されるのである。

楊定見本は、その本文の改変と評を通じて、好漢の兇暴な・正義とはいいかねる側面を消去し、或いは目立たないようにさせ、或いはその「正義」なることを強調し、敵役はその「悪」なることを強調し、ニュートラルな単なる情景描写や人物描写にも善悪の色分けを加え、好漢と敵役の争いを「善玉vs悪玉の対立」として見ることを要請する(一)(二)〜(三)。甚だしくは、単に理不尽なだけの好漢の振る舞いすら「悪人をやつつける正義の好漢」の図式にすり寄せて解釈される(一)(三)。また、生辰綱の強奪は貪官汚吏の「不義の財」を奪うのだから正しい、宋江や朱全の内通も、貪官汚吏の不義の財を奪った「正しい」賊を逃すことだから正しい、と貪官汚吏批判を経由した上で正當化され、この事件を「悪の貪官汚吏vs正義の好漢」という構図で見ることが要請されている(二)(二)。もちろん、随所で好漢と貪官汚吏を対比した形で示し、好漢たちの対立者が貪官であること、貪官汚吏の迫害が、もともととは叛心無き英雄たちを落草にまで追いやることを強調し、しばしばこの対立が「正義であり、尽忠報国の志をもつ好漢vs君側の姦臣、貪官汚吏」であることをも強調している。

伝奇の諸作品においては、こうした方向性はより明瞭であり、露骨である。「義俠記」では、武松の鴛鴦楼の大殺戮は、仇三人のみを殺す「道理の通った殺人」へと修正され、蔣門神は悪事を働く場面を増やされ、女好きでしかも弱いやつという側面を強調された上に、施恩の父が死んだ責任までかぶせられる。許自昌『水滸記』の生辰綱強奪は、貪官汚吏の搾取ぶりに対する反感が動機とされ、好漢たちは敢えて仲間を自首させて、官軍を待ち受けて戦うほど、正義を貫く。『宝剣記』に至っては、林冲は、高俅・童貫を弾劾する上奏文を奉るほど堂々たる姦臣の対立者である。

そして多くの伝奇の多くの場面において、好漢たちに叛心がなく、それどころか招安を待ち望んで尽忠報国したいと志していること、君側の姦に憤激し、それを除こうと望んでいることが示されている。対立は明瞭に異質な「善玉 vs 悪玉」の対立であり、同時に「正義の好漢 vs 悪の貪官汚吏」の対立であり、しばしば同時に「忠君愛国の好漢 vs 誤国危民の君側の姦臣」である。

こうして「善玉 vs 悪玉」の対立の構図、「正義の好漢 vs 悪の貪官汚吏」の対立の構図、そして「忠君の好漢 vs 奸邪たる君側の姦臣」の対立の構図が前面に押し出される。好漢が対立する貪官は悪であり、従って好漢が（貪官の支配する）公権力に対抗することは正義とされる。この時、容与堂本の価値中立的な、描写の韻文、粗筋のリフレインや予告を主眼とする詩句等は、この構図に沿った記述に改変され、或いは入れ替えられる。実利を目的とした忠君の「不純さ」は抹消され、「純粋な」忠君のための忠君として記述し直される。好漢と争うあまたの同質者たち、或いは敵対者の中にひそむ好漢との同質性は後景に押しやられ、好漢の理不尽な乱暴、兇暴・兇悪な側面、正義とは無縁の強盗のからくりの面白さ、法に反し自らの危険を冒して友人を救う豪胆さ、等は、それに眼を向けないように要請される。同時に、兇悪・兇暴な豪傑の、正しいとはいいかねるが「すかつとする」暴力の爆発、何ものにも拘束されぬ好漢の傍若無人さの表れとしての叛逆心の発露、王法の貫徹に対するおおつびらな・或いはひそかな拒否、等への共感 は抹殺される、或いは表にあらわれなくなる（或いは、意識のより深いところで感じられる「共感」は、意識の表面にある「正義」と結び付けられることのない限り、安心して表面に浮き上がることができない、と言うべきであろうか）。

ここで注意すべきなのは、「正義の好漢vs貪官汚吏」の対立の構図は、例えば生辰綱強奪における「正義でもない好漢の、見事な計略による大胆な強盗」にそのまま喝采できないところから要請されたものであり、また、私的交情を王法に優先させることを何のひっかかりもなくほめ称えたりはできないところから要請されたものであり、また、兇悪な豪傑の、正義とは無縁の暴力の爆発に手放して共感するわけにはいかないところから要請されたものであるということである。楊定見本・評や伝奇の諸作品の論理からいえば、王法に背いて役人が賊と内通すること、公権力の貫徹を拒むことは、明らかに悪なのである。原則として悪であるからこそ、貪官汚吏批判によってこれを(例外として)正当化する必要が生ずるのだ。また、正義でもない好漢に喝采を送るわけには(少なくとも表向きは)いかないのである。だからこそ好漢は正義だと主張しなければならぬのだ。楊定見本・評や伝奇作品の、意識的な、「道理の通った」貪官批判、しばしば水滸伝の「反官」「反権力」意識のあらわれとして引用されるころのものは、好漢の違法行為を違法なるままに、或いは違法であるからこそ快く感じることを非とし、王法は当然のこととして私的関係に優越し、あらゆる領域に貫徹すべきものだと同提するからこそ、生ずるのである。

この構図が「忠君の好漢vs君側の姦臣」の構図としばしば重なり、好漢の忠君の強調と、好漢の姦臣との対立の強調がいわば比例する状況にあるのは、このように見てくると、ある意味では当然といえよう。筆者はかつて、「水滸伝」中における「忠義」について、容与堂本においては、朝廷・皇帝への忠誠に限られておらず、仲間・兄弟への誠実という用法が見られること、それが楊定見本・金聖歎本等において、朝廷・国家への忠誠にしほられていく、いわば朝廷・皇帝(或いは国家)による「忠義」の独占、という現象があることを指摘し、また、この現象が、朝廷への背反を特別なもの(謀叛)として位置づける意識の成立と表裏をなしていることを論じた。<sup>56</sup>「好漢vs貪官汚吏」の対

立の構図も、こうした現象とパラレルになっていると考えられよう。好漢たちが「謀叛人である」と観念されてはじめて「謀叛」の正当化が必要になるし、彼らが「謀叛人⇨朝廷（・国家権力）」に対立するもの」と観念されてこそ、（強人・無頼ではなく）権力側のものが好漢の対立者として考えられることになる。貪官批判は、国家権力のコントロールから外れることが謀叛という特別の範疇の犯罪であるという認識、好漢がその謀叛人であるという認識を前提とし、そのような特別に「正しくない」好漢を、安んじて共感できる「正しい」存在とするはたらきをもっている。そこでは皇帝、或いはただ一つの正統王朝が一元的に「正しさ」の由来を独占していることが、当然の前提となっている。文簡本（征田虎・王慶部分）に示されているような、時の正統王朝と対抗した権力を打ち立てた（或いはそれに従った）という理由で無条件に「謀叛人⇨悪人」とはせず、甚だしくは田虎・王慶に尽くすことも「忠」として褒めたたえるような、多元的な「正しさ」の由来を許容する認識は、ここでは影をひそめている。

この構図の性格、或いは出自を検討する上では、『大宋宣和遺事』<sup>57</sup>水滸故事部分も参考にならう。ここでは、例えば宋江が九天玄女から授かった天書に、四句の詩、三十六人の名簿と共に

103 天書附天罡院三十六員猛將、使呼保義宋江爲帥、廣行忠義、殄滅姦邪。

とあった、とある。姦邪を殄滅する好漢、好漢たちと「姦邪」との対立は、水滸説話の早期からのテーマだったかのように見える。しかし、ストーリーを追ってみると、天書を受けた宋江は、まず「梁山泊には二十四人がいるから、自分を含めて二十五人になる」と考え、九人（とあるが後るとつじつまを合わせるならば十人いなくてはならない）を伴い梁山泊に上るといふ挙に出るのであり、その後もストーリーで重視されているのは、天書にある三十六人がいかに揃っていくか（まだ欠けているのは何名で、誰か）である。宋江らはこうして、「強人を統率して州県を劫略し、

放火殺人を行い、淮陽京西河北三路二十四州八十余県を攻め奪い、子女玉帛を劫掠し、虜掠すること甚だ衆く、討伐に來た呼延綽らも仲間に加わるに至る。三十六人が揃うと宋江は呉加亮と相談して、「我ら三十六人の猛將が皆勢ぞろいしたのは、東嶽の保護の恩を忘れてはいけない、お詣りにいき、願ほどきをしよう」と、東嶽に向かう。この時に掲げた旗に書かれた詩、

104來時三十六、去後十八雙。若還少一箇、定是不歸郷。

に見えるように、三十六人が揃った後に重視されるのは、それを欠けさせないことなのである。そして「朝廷はどうしようもなく、榜を出して宋江を招諭するほかなかつた」という次第で、張叔夜による招安に至る。つまり、『宣和遺事』水滸故事部分ののストーリーに即して見れば、宋江は別に姦臣や貪官汚吏を特に攻撃の対象とはしていない（州県の劫掠にそういった要素がある、という強辯は不可能ではないが少なくとも明示されていないのは確かである）。朱勳や蔡京、童貫などを打倒しようなどと考えている様子もないようである。「殄滅姦邪」という表現は、「姦邪」を姦臣、貪官ととるならば）ストーリーといささか乖離している。一方で、歴史書、野史、雑史類の書き抜き・綴り合わせを主体とし（その材料となったと目される資料については既に多くの指摘があるが、前半の八割以上が『皇朝編年綱目備要』の一部と、後半の九割以上が『南渡録』の一部と一致し、またまった部分で材料が指摘されていないのはこの水滸故事の部分と李師師と徽宗の交渉を記した場面のみといつてよい）、前半は宣和の姦臣の悪行と徽宗の失政、亡国の運命を予告する怪事を綴り、後半は徽宗・欽宗の北狩後兩帝が受けた恥辱と、悲惨な末路を記すこの書が、非常にはつきりした、宣和の失政に対する批判、姦臣を糾弾する指向のもとで書かれたことは既に言われている通りである。即ち、「殄滅姦邪」の語は、『宣和遺事』の編纂者の意識、指向とは非常によく重なるのであり、

物語が語られた場（があつたとすれば、そういう場）より、編纂者及びそれに近い場で、書き加えられた可能性が相当にあると考えるべきであろう。

また、伝奇作品の中で、というより、『水滸伝』に材をとったあらゆる作品の中で、恐らく最も姦臣批判、好漢と姦臣の対立の構図が強烈に打ち出されている李開先『宝剣記』をめぐる事情も、この構図の出自についていくばくかの示唆を与えるかもしれない。『宝剣記』の作者李開先は嘉靖八年、二十八歳で進士となり、のち官は太常少卿に至り、嘉靖二十年、九廟の火災に際して官を辞めている。李開先の免官の「真相」については、論議が喧しいが、「真相」はさておき、本稿としては、彼が

105 因忤權臣遭斥譴、甘爲林下老明經。（『李中麓閒居集』卷三）  
田間四時行樂詩次韻一百首間有言及武事者亦安不忘危之意云）

と詠み、この時の宰相夏言が後に誅された時、夏言を弾劾した戸科給事中劉繪を称え、

106 夏相昔貪縱、獨能發其奸。（『李中麓閒居集』卷一）  
九子詩・劉嵩陽繪）

と述べていることなどから、李開先自身が、「權臣に忤」つての免官だったととらえて——とらえたがつて——いたこと、自身を免官に追いやった人物が「貪」「奸」という言葉で形容されるような人物だととらえていたことが分かればとりあえずは足りる。また諸家が指摘するように、実際に政治に参画しなくなつて後にも、李開先が強い経世意識をもっていたことは注意される。<sup>(59)</sup>従つて、林冲を姦臣の堂々たる対立者としてとらえる考え方、林冲の失脚が直接には弾劾の上奏文にあることなどは、ある程度、李開先自身の経歴の反映、いな、林冲に対する李開先自身の移入にあるとみて良いであろう。作者にとつての対立者たる姦臣が、主人公にとつても対立者となり、好漢は姦臣の、（作

者自身よりも?) 堂々たる対立者となつて、君側の奸を除き尽忠報国せんとする志を滔々と披瀝することになる。

「官」であるか、「官」たることをめざす人々、実際に「官」でなくとも「官」となるべき教養と経世意識をもつ人々にとつて、「官」という点では同質者である貪官・姦臣が、好適な対立者であることはいうまでもない。「官」たることをめざす、つまり国家権力に参画しようとする意志をもつ時にこそ、貪官・姦臣はその障害としてたち現れる、いや、障害となる(もう少しきれいな言い方をするならば、理想に反した権力の行使を行っている) 対立者は姦臣・貪官として認識され、形象されるのである。この、国家権力へのコミットメントを志向する立場から出た貪官批判が、自らの参画しようとしている国家権力自体の否定につながるのには当然である。「不反皇帝」は「反貪官」にすでにして内包されていると考えるべきであろう。

「水滸伝」を読んで我々が漠然と感ずる、秩序と拘束をぶちこわし振り払う、何か破壊的なエネルギーの噴出、逸脱すること・拘束されないことへの強い志向を、「水滸伝」の「反官」「反権力」意識等と名づけ、「好漢vs貪官汚吏」の対立の構図を明瞭に示す記述をその証拠とするならば、それは恐らく取り違えである。それらはむしろ、この構図が切り捨て、眼を向けないように要請しているところのものである。「好漢vs貪官汚吏」の対立の構図は、そうした無方向で混沌とした破壊への、「正しさ」抜き、理屈抜きの共感、朝廷・皇帝に優先し得る別の「正しさ」の由来が存在し得るとする意識とは対蹠的な志向から生じ、それらを不純物として排除し、切り捨てたところに成立する。この構図は、こうした「危険な」の感覚・意識(あるいは無意識というべきか)を去勢し、我々に、好漢の無法を「正義」の名のもとに安心して楽しむようにさせるのである。



1 北京図書館蔵本を影印した『明容与堂刻水滸伝』（上海人民出版社、一九七三年）を用いる。ただし、これより原刻本から遠いと考えられている、内閣文庫所蔵の容与堂本にある、末尾に「庚戌（万曆三十八年と推定される）仲夏日虎林孫樸書於三生石畔」と記す李贄の序（『焚書』所収のものと同文）はこの本には無いという。

2 不分巻本の系統は百回本、百二十回本が存在するが、不分巻百回本は清刊が多く、百二十回本に先行するとの確証があるものは、現存の範囲では無いようである。百二十回本は、『忠義水滸全伝』と題するものと、『忠義水滸全書』と題するものがあり、前者が古いと目されている。孫楷第一九三三は馬廉蔵（孫楷第一九五七以降は北京大学図書館蔵として掲載）の『忠義水滸全伝』を「袁無涯原刊本」とするが、その根拠は記していない。この本は筆者はまだ目睹し得ていないため、同じく『全伝』と題する宮内庁書陵部蔵本（孫目は「宝翰楼本」とする。宝翰楼という書肆は実在したが、この書が宝翰楼刊であるという証拠は筆者が探した限りでは見つからない。封面に「宝翰楼蔵書記」の印があり、この書が混入したのではないか）を用いた。私見では、この本は明代の諸記録のいう袁無涯刊本そのままとは受け取れず、その最終的な刊行は天啓以降と思われる（笠井一九九二a注14参照）、排印により評を比較した範囲では北京大学図書館本とはやや相違がある（注34、笠井一九九二b注1参照）。

3 『新刊京本全像挿増田虎王慶忠義水滸伝』（ただし各巻首・巻末題は一定でない）。ここではフランス国立図書館蔵残本（巻二十、巻二十一第四葉まで）の写真版を用いた。馬幼垣一九八五によれば、欧州に存在する残本の状況からは、挿本にも二つの系統があり、余象斗本より先行する可能性があるのはこのフランス国立図書館所蔵本を含む挿増甲本の系統であるという。従って、ここで「挿増本」と言うのは、厳密には「挿増甲本」と言うべきであるが、本稿では挿増乙本の系統は用いないので、敢えて区別せず、挿増本と称した。

4 『京本増補校正全像忠義水滸志伝評林』。日光輪王寺慈眼堂蔵本を影印した『水滸志伝評林』（文学古籍刊行社、一九五六年）を用いる。

5 なお、本稿で引用する部分に関しては、挿増本と余象斗本は約一巻のずれがある（挿増本巻二十が余象斗本巻二十一に相当する）。

6 文簡本、文繁百二十回本にこの物語が含まれるほか、世徳堂刊「水滸記」（万曆十八年刊、お茶の水図書館蔵）、沈璟「義俠記」にも宋江らが田虎・王慶を討つことを前提とした記述が見られる。詳しくは笠井一九九二a参照。

7 趙明政一九五八は、文簡本の征田虎故事を征遼故事の一部であったものとし、王慶は、冒頭に登場する王進であり、南宋在の人物史斌が原型で、本来抗金の故事であったとしている。

8 なお花関索が鮑三娘を娶る話は四川・雲南の民間伝説と関係が深いという。（金文京一九八九a、六一〜六二頁）

9 つまり、この二種の結義グループは互いに排除し合う（反目し合っているという意味ではなく、本質的に同時に属することができないという意味で）関係にある。その意味で、文繁本における結義は文簡本と比べても閉鎖的・排他的であると言えるだろう。なお、雑劇にみられる義兄弟結合が、「水滸伝」に表れたものより開放的であり、堅気の人々と交通が持ち得ることは笠井一九九二（二）、（三）雑劇における「結義」の特徴と相互扶助論理の適用範囲で論じた。

10 これはまた、文簡本において征田虎・王慶部分を挿増した目的は、楊定見本について言われる「宋江らをもっと活躍させてその忠義を強調した」という性格よりも、（宮利主義の福建の書肆が故事の多いことをもって売りものにした、というに加えて）、百八人の中には入っていないけれどもそれなりに面白く実力もある（喬道清は公孫勝より格上であるし、馬霊の神行法は戴宗より優れていた）、新しく出てくる豪傑の話を、梁山泊の百八豪傑とからめてぶつけたり、味方にしたりしながら楽しむ、という性格が強いことを示しているよう。

11 以下、文繁本に於ける回数は□で示す。基本的には容与堂本を引用し、その際は漢数字で回数のみを表示する。楊定見本を用いた場合は「楊」の字を冠する。

12 武松故事のこの一段が「江湖の義氣」に基づくものであり、いわゆる「正義」と相違することは、孫述宇一九七八（同

一九八一所収、四二頁〜四三頁）で論じられている。

13 木山一九六五、一三六頁。

14 万曆四十年繼志齋重刻本の影印（古本戯曲叢刊初集所収）を使用する。なお、馮夢禎『快雪堂集』卷五十九（日記）、万曆壬寅（三十年）九月二十五日の条に呉徽州班による上演の記録が見える。

15 以下伝奇作品を引用する際の□内数字は齣を表す。

16 これは、『魯智深喜賞黃花峪』雜劇における、（もと強人）蔡挖搭の（蔡衙内への）矮小化（詳しくは笠井一九九〇「三、（一）善玉の強人と悪玉の強人」と共通した方向であると考えられる。

17 木山一九六二、二七三頁。なお、（一）内は引用者が前後から補った。

18 宮内庁本は一部欠けているので、同系統の郁郁堂刊『忠義水滸全書』により補った。

19 余象斗評は、一方では、好漢の正義（・忠義）・忠君を強調し称揚する方向性も、強く打ち出している。余象斗評の意識的側面・建て前は、むしろこちらであろう。

20 木山一九六五、一三七頁。

21 楊定見本では、方臘の乱の原因として「朱勳在吳中徵取花石綱、百姓大怨、人人思亂」（楊一百十）と述べるが、これは容与堂本には存在しない記述である。

22 宮崎一九七二、一三五頁。

23 『水滸伝』では、宋江らが方臘を討つて都に戻り、提出した上奏文の日付が宣和五年九月となっているが、史実では蔡京はそのわずか三年後、失脚し流される途中靖康元年七月に卒している。また、王都尉が第一回に出てきた人物（神宗の義弟にあたる王誥と考えられる）とすると、遅くとも『宣和画譜』（王誥の贈官・諡を載せる。宣和庚子（二年）序）が成立した時期には卒していることになる（翁同文一九六八。『宣和画譜』成立年を宣和四年とする）。従ってこれらの記述



高俵の性格規定を踏まえた氏の論旨の展開の方向は、筆者の問題関心とは大きく異っており、高俵に強人としての形象が濃厚にあるという本稿の立論は、着眼自体においても、論の展開の方向においても、氏の該論文の影響下に成ったものではない。

29 『義俠記』には、李逵が高唐州で殷天錫を殴ったため、殷天錫が李逵を捕え、その兄で滄州知寨の殷天瑞が柴進を梁山泊の賊と通同したかどで捕え、殷天瑞自ら高唐州に護送する、その途中、梁山泊の宋江が花榮・顧大嫂らを率いて護送車を襲い、殷天瑞は妖術を使うが、宋江は九天玄女から授けられた靈符で術を破り、殷天瑞を殺して柴進を救い出し、軍勢を高唐州に差し向けて李逵を救い出すこととする（十三）という一段がある。なぜ滄州で捕まえたものを高唐州に護送せねばならないのか、など不審の点もあり、ここでは、高廉の名も見えず、公孫勝も登場しない。

30 この一段の性格については、笠井一九九二bにおいても簡単ながら触れている。

31 「晁正」は「保正」又は「晁保正」であった詩句を訂正し（損つ）たものか。楊定見本では「晁蓋」とする。

32 現行の『水滸伝』では、宋江が急報した時晁蓋の邸にいたのは、晁蓋、呉用、公孫勝、劉唐の四人であり、石碣村にいた阮氏兄弟を合わせれば七人となり、いずれも「六人」には合わない。これは、生辰綱強奪が白勝を含めて七人で行われ、白勝が捕えられたのち、宋江が急報して残りの六人が逃げた、という設定になっていた時期に作られた詩がそのまま訂正されずに残っているのではないか。もしそうだとするならば、『水滸伝』を演変史と、現行本の構造から見て、六人とは、恐らく公孫勝を除く六人であろう。

33 本文では、文繁本同様、朱全のみが宋江を発見し、逃がしたことになっていて、雷横は宋江を大目にもみる気持ちがありながらそれを示す機会を得ずに帰ったことになっている。しかし、図では朱全、宋江、雷横と見られる三人の人物が描かれ、『朱全雷横放走宋江』と題しており、評も「二人」とはつきり書いてある。余象斗本はこのように本文と図・評が矛盾している箇所が多くあり、単なるミスである可能性のほか、より古い・或いは現行本とは別系統の水滸説話・『水滸伝』

を反映している可能性も考えられる。

- 34 北京大学蔵本を用いたとする陳曦鐘・侯忠義・魯玉川輯校『水滸伝会評本』（北京大学出版社、一九八一年）では「心」は「根」に作り、「眞」は「極」に作る。また、「轍」は不明であるが、当面、同書の校改に従う。
- 35 汲古閣刊本の影印（古本戯曲叢刊初集所収）を用いる。
- 36 木山一九六五、一三三頁。
- 37 孫述宇一九七八（同一九八二所収、二八頁）。また、この段の性格についても言及している。
- 38 この詩は或いは、容与堂本で、やや少し前、楊志が開封に至った場面に置かれた、「清白傳家楊制使、恥將身跡履危機。豈知奸佞殘忠義、頓使功名事已非。（十二）」の詩を改作したものかも知れないが、楊定見本の詩の方が、容与堂本のものよりずっと対立の構図が鮮明に打ち出されていると言えよう。
- 39 嘉靖刊本の影印（古本戯曲叢刊初集所収）を用いる。
- 40 この記述から考えると、『宝剣記』の設定では、方臘は宋江によって討たれたのではなく、林冲登場の時点ですでに討たれていたのであり、しかも西方の寇として位置づけられているようである。『宝剣記』は、他にも魯智深や公孫勝の設定など、戯曲の大筋や重点と関係がない部分で（でも）、現行本『水滸伝』と食い違ふ点が多い。
- 41 この設定も現行の『水滸伝』とは異なる。
- 42 万曆海昌陳氏刊行の影印（古本戯曲叢刊第二集所収）を使用した。
- 43 許之衡飲流齋鈔校本の影印（古本戯曲叢刊第二集所収）を使用した。
- 44 楊戩が梁山泊を攻めたという設定も、また宿太尉が楊戩を罵って「你只好齋雲稱社夥」という（齋雲社は蹴鞠のギルド名として有名だが、蹴鞠がもとで出世したとされるのは言うまでもなく高俅である）のも、小説『水滸伝』とは違った設定である。ただし、容与堂本では、高俅が梁山泊を攻めようとした矢先、梁山泊側が濟州城内に貼り付けたという詩に

「生擒楊戩與高俅」とある（八十）ので（この詩は楊定見本においては改変されている）、これは「義俠記」の創作では必ずしもなく、楊戩が梁山泊を攻めたという設定も行われていたのかもしれない。

45 中国戯曲研究所蔵旧抄本の影印（古本戯曲叢刊第二集所収）を使用した。

46 『水滸伝』における「忠義」の語が、常に朝廷・皇帝への忠誠を意味するとは限らず、一般的な正義の意味や仲間への誠実を意味することがあることについては笠井一九九二bにおいて論じた。文脈から考えて、これらの例は或いは「忠義」の語を、正義・忠君双方にまたがるように用いているものかもしれない。

47 笠井一九九二b参照。

48 楊定見本の読点に従えば「汝可替天行道、爲主全忠仗義、爲臣輔國安民、去邪歸正。」となり、排印本もこちらを採るものがある。いずれとも決しかねるが、とりあえずこのように読んでおく。

49 なお、こうした実利を目的とした招安、それを超越するものとして公孫勝らが提示する隱遁への道については、橋本一九七四に詳しい。橋本氏は「実利としての『高官重爵』は、『忠義』のイデオロギーよりも水滸説話としては原初的ではなからうか」とされる。

50 以下の分析の詳細は、笠井一九九〇参照。

51 『劉千病打独角牛』雑劇、『王矮虎大鬧東平府』雑劇、清平山堂話本『楊温攔路虎伝』、『水滸伝』第七十四回「燕青智撲擎天柱」など。これらの関係についての筆者の考えは笠井一九九〇注42に簡単ながら述べてある。なお、そこでもふれたように、『楊温攔路虎伝』と『水滸伝』第七十四回の関係については大塚一九八七、八十八～八二頁に指摘がある。

52 詳しくは笠井一九九〇「三、道徳的正義による義挙へ（一）善玉の強人と悪玉の強人」で論じた。なお、佐竹一九九三では、この部分の要旨を引いた上で、「この一連の物語のなかで興味を引くのは、主人公の蔡跣踏が楊雄をしのぐ武勇の達人であり、その名の跣踏が……その意味は……『おでき』に他ならないことである。これはまさに夷堅乙志の『蔡侍

郎」に、『宣和七年、戸部侍郎蔡居厚、罷知青州、以病不赴、帰金陵、疽発于背』と言う場合の「疽」のことではないだろうか。この故事が夷堅志に記されているということは、すでに南宋の時期に蔡居厚が梁山泊の敵役として物語の一方の主人公となっていたことを示している。物語の展開は本来の悪官人蔡衙内を、強人蔡跣踏に変容させながらも、かれを梁山泊集団の打倒の対象としてゆく過程をたどったのである。」とされる。この記述の後半部は正直にいうと筆者にはややわかりにくかったが（夷堅志の該当の記述からは、「物語」が行われていたということがわかるのか、「本来の悪官人蔡衙内」というが、「悪官人」としての形象をもつ「蔡衙内」という人物が登場している資料はあるのか、……）、蔡居厚が蔡跣踏の原型であるとの説と思われるので、この点について考えてみたい（知州をつとめた官人である蔡居厚と、女を拐い楊雄に勝ち、水南寨にたてこもる強人蔡拏搭、全く違う形象の二人の人物について、一方が他方の「原型」だと言うものなのか、「原型」だと言うことにどのような意味があるのかよくわからないが）。

夷堅志に載せる蔡居厚の故事は、梁山泊の賊を大量に、しかも投降を受け入れたのに言を翻して殺した報いとして疽ができて死に、地獄でも責め苦を受けている、という内容である。志怪の系統の話を多く収める筆記には、苦痛を伴う突然の死の原因として、癰・疽が出てくることがままあるが、その中で、悪事、特に殺生を行った報いとして、腫れ物ができて死ぬという話は決して珍しくない。例えば、盗賊を多く殺したため癰疽ができて死んだとされる呉仲弓（『呉仲弓』、『夷堅甲志』巻十四）、都漕司幹官として人々から金を搾り取り、背の左右に疽ができて死んだ馬某（『人死爲牛』、『夷堅甲志』巻十七）、殺生を嗜み舅姑によく事えず、腫れ物ができて蛆がその中にみち、しまいには狂人のようになって死んだ張十の妻（『張十妻』、『夷堅乙志』巻二）、遺産をめぐって賄を受け、ある女性を拷問して無実で死なせた末、疽ができて死んだ溧陽知県狄某（『陳良謨』、『見聞紀訓』）、疽をよく治すという評判の医者であったが、実は財をむさぼるのが目的で、ひどくない傷の者でも薬を用いて疽を起こさせたりまでしており、大きな疽ができて七日で死んだ符助教（『符助教』、『夷堅丁志』巻十）、師事していた孔基を殺して兄弟ともども不可解な死を遂げ（そのうち一人が疽で死んでいる）、跡継



ぎも無くなった孔敞の息子たち（「孔基」、『太平広記』巻一九所収、出『還冤記』、母の病を治すため高い礼金で鬻體を求めた隣人に、流れ着いた屍の頭を斬り取つて提供し、結局大きな腫れ物ができて死んだ楊氏（「庾宏奴」、『太平広記』巻一九所収、出『幽明録』）、魚、蟻等を大量に殺したために腫れ物ができて死んだ例（「韓立善」「僧修準」、『太平広記』巻二三三所収、ともに出『徹戒録』）、人々が精霊として畏れている樹を樹皮から血が出るのも構わずに伐り、背中に疽ができて死んだ王田功（「靈泉鬼魅」、『夷堅丁志』巻五）等。また、これこれのことをしたらおできができる、という誓いの言葉は、元曲や白話小説にしばしば見られ（例えば李逵が生臭ものを食べない誓いをたてる時「今回但吃時、舌頭上生碗来大疔瘡」と言っている（五三））。また、『望江亭』劇第三折、『合同文字』劇第三折等にも見える）、何らかの因果応報の結果としてのできものという觀念がかなり普遍的にあつたことを示していると考えられる。蔡居厚の例もこうした多くの例のうちの一つであると考えるべきではないか。

一方、疔疽について見ると、これが疽と全くイコールであるかという点に、まず問題がある。疽は、「疽重於癰、發者多死」（巢元方『諸病源候論』巻三十五）と医書に言うように、はれもの、できものの中でも特に症状が重く、上述の例にも見るように、多くの場合死に至っている。これに対し、「疔疔瘡瘡」がごつごつ・でこぼこしたさまを表し、「疔疽」も、こぶ（『水滸伝』でも、李逵が羅真人に雲に乗るように言われて、「却不是要！若跌起來、好箇大疔瘡！：からかわんでくれよ、踏み外してもしたら、どでかいたんこぶがでたらあ。（五三））と言う場面がある）や球状・かたまり状のものや、結び目、わだかまりやしこり等を指す用法があるように、疔疽の語義の中心にあるのは、でこぼこ・あるいはぶくつとふくらんだかたまり、ということ、腫んだり腫れたりしているとは限らず、そのせいで命に別状があるとも言えない。蔡挖搭も挖搭のあだ名をもちつつ強人として元気に活動しているし、阮小七は登場の韻文で「疔疽臉横生怪肉」（十五）とされ、没毛大虫牛二も「杈杈怪樹、變爲臄膳形骸」（十二）と描写され、蔣門神もこぶがある（三）。そして、以上の例からもわかるように疔疽は蔡挖搭の専売特許ではなく、強人の描写には珍しくないものである。

悪事を行ったために痘で死んだのは蔡居厚ばかりではなく、疔痘をもつ強人は蔡挖搭ばかりではなかった。蔡という姓が共通であることから、行動や形象が全く異なる両者について、蔡居厚が蔡挖搭の原型だとするのは、余り説得力がない、ないしは有効性がないと言わざるを得ない。

- 53 康進之『梁山泊黒旋風負荊』第三折【玄篇】誰不知你是鎮關西魯智深、離了五臺山終落草、……
- 54 金文京一九八九b、三二七頁〜三三一頁。
- 55 ここでいう「国家」は当時の文献で用いられる意味でのそれであって、nationの訳語としての近代的な意味ではない。
- 56 笠井一九九二b。
- 57 士礼居叢書本を用いる。
- 58 汪仲賢一九二七、周紹良一九八二等。
- 59 李開先の生平や思想については、徐扶明一九五七、路工一九五九、八木沢一九五九、徐朔方一九六二、卜健一九八八等を参照した。徐扶明氏、路工氏らは特に李開先と夏言の關係が「忠と奸の闘争」であることを強調しているが、徐朔方氏、卜健氏らが指摘するように、事態はそれほど図式的であった訳ではないだろう。

引用文献

- 汪仲賢一九二七：「宣和遺事考証」『中国文学研究』（小説月報）第十七卷号外）
- 翁同文一九六八：「王誅生平考略」『南洋大学学报』二。「宋史研究集」第五輯（一九七〇年）所収。
- 大塚秀高一九八七：「中国小説史への視点」放送大学印刷教材
- 笠井直美一九九〇：「義賊」の誕生——雜劇『水滸』へ」『東洋文化』七一
- 笠井直美一九九二a：「金陵世徳堂刊『水滸記』について」『東方学』八三

笠井直美一九九二b：「隠蔽されたもう一つの『忠義』——『水滸伝』の『忠義』をめぐる論議に関する一視点——」  
『日本中国学会報』四四

木山英雄一九六二：『水滸伝』の世界』『世界の歴史』六、筑摩書房、二六一～二七四頁。

木山英雄一九六五：『水滸伝』の背景』『中国の八木小説』平凡社、二二九～二三七頁。

金文京一九八九a：「I解説篇」『花関素伝の研究』汲古書院、一～八八頁。

金文京一九八九b：『中国小説選』角川書店

佐竹靖彦一九九三：『水滸伝における伝統』『柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族』汲古書院、二五三～二七  
一頁。

周紹良一九八二：『修硬山房粹《宣和遺事》跋』『水滸争鳴』一。同『紹良叢稿』（齐鲁書社、一九八四年）所収。

徐扶明一九五七：「李開先和他的『林冲宝剑記』」『文史哲』一九五七—十。『元明清戲曲研究論文集』（人民文学出版社、  
一九五九年）所収。

徐朔方一九六二：「評《李開先的生平及其著作》」『文学遺產增刊』九

孫楷第一九三三：『中国通俗小説書目』中国大辞典編纂処・国立北平図書館

孫楷第一九五七：『中国通俗小説書目』作家出版社

孫述宇一九七八：「水滸伝：強人講給強人聴的故事？」『明報』十三—八。同『水滸伝的来歴、心態与芸術』（時報出版  
公司、一九八一年）所収。引用は後者による。

趙明政一九八五：『水滸』田、王二伝新探』『江漢論壇』一九八五—十一

橋本堯一九七四：『水滸伝における隠遁の道——文簡本水滸伝からの示唆』『入矢・小川教授退官記念中国文学語学論  
集』、五九—六〇四頁。

卜健一九八八：『李開先伝略』中国戯劇出版社

馬幼垣一九八五：「現存最早の簡本〈水滸伝〉——〈挿増本〉の発現及其概況」『中華文史論叢』一九八五—三、同

『水滸論衡』（聯経出版事業公司、一九九二年）所収。

宮崎市定一九七二：『水滸伝——虚構の中の史実』中公新書

八木沢元一九五九：「李開先伝の研究」『明代劇作家研究』講談社、一七二—二四四頁。

路工一九五九：「李開先的生平及其著作」『李開先集』中華書局、一〇三三—一〇四六頁。